庭訓往來諺解

頭書繪入

新刻改正

庭訓往來諺解

東都書肆　甘泉堂梓

曙文庫

昌平黌讀書

庭訓往来諺解

庭訓といつるは。幼弟ふりのと教ゆるといつりこれいむ〳〵韓魏とと李稷り頃る慢りられども。怪しふきくんふて。つつて下寧ふ礼と考られ〳〵。ゆ〳〵俗ふ文路公られふ代り沙〳〵ふ。韓ごと〳〵ごふるふやと云るふ李稷が父ハ我門下なるふ稷魏とと慢るとゆ〳〵父ふ礼と沙て教と失ふる匿。高稷と子乃如く恐へそり改わずハ庭に臨て別んといつる故るのよう庭訓とふこと出〳〵ふるく〳〵孔子の鯉庭とふると教へ。ふ〳〵云とりて稷とすさて往来消息と云ふば。書簡の往復といつり。世玄恵法印が庭訓の怪〳〵事物の名称と藏子乃優れるに去ふられど。古来より考ふ沙られて。幸蒙ふ教るの文しせう。去のれども世を〳〵時勢ごふり〳〵今〳〵〳〵〳〵〳〵解す為のふごれりの事。又此れふ文字とかう〳〵ふ沙ばられふとやふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵教へ。一業毎の後ふ文字と信受とりて紀〳〵。教ふとあハせ〳〵校正業に出ふ。物器物号就州ふる。ふ〳〵ハ一日勝地〳〵〳〵〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

北小路玄慧法印ハ初儒家ヲ去て北畠姓ヲ名り中頃天台宗ニ帰して僧となる平の貞時其識量を知て乾元元年相州鎌倉ニ最勝園寺建立の時玄慧を以て導師とあさ〜む故ニ暫爰ニ住ス素より玄慧ハ僧律の事を以て専とせざれバ辞して復還俗ス身終るまで無髪にして自ら洗心子と号し亦健軒と称ス著所乃太平記四十一巻大ニ行はれて其博識以て世ニ知る所なり将童蒙ニ便なるべしと為す

庭訓往来と作り都鄙に渉りて珍重ス庭訓と云ハ論語ニ孔子庭ニ立て詩礼を問ふ伯魚ニ示ること有と以て童蒙ニ教諭するを庭訓と号し往来と号るなり

庭訓往来

春の始の御悦貴方ニ向て先祝ひ申候畢ね富貴万福猶以幸甚幸甚

朝拜

年の始の公事なり

抑歳の初の朝拜者朔日元三之次を以

庭訓往来

○庭訓とハ孝子を論語季氏篇に孔子庭ニ立てまつるを伯魚ニ問て詩礼を聞ふ

時汝何れを学びたるやと云て詩礼を学ばずんバ汝て言ふ事なしと云ハ

こと有りしかと云て庭訓ハ孝子ニ教諭する物なり

○往来とハ往者の義にして返往返往せざるなり

春始祝貴方之祝中候年

富貴万福猶以幸甚

○春始とハ春の初ハ

○貴方とハ歳徳と指ス也一説中宵徳の方にして俗ニ恵方ハ吉方

○富貴万福ハ幸甚ハ幸ヒ甚シキと訓ス

文意 春とハ春の初ハ

方ニ向ひて〜まづ年の恵

紙幣を安置して

抑歳初朝拜者

朔日元三之次第中之儀故

急ぎ申に可之裏人
人子の日の遊ふ驅
催さ被之間思ひ乍
延引す谷の鶯檐の
花と忘れ苑の小蝶
の日影ふ遊ぶふ似
〳〵頻本意と背き
候ひ畢ぬ

子日遊こと
似たる長閑花苑小蝶
日新顔
有て
年

○○初春ハ新賞と奏賞と云ひ事の始ふ先と物〳〵奏ること○新日元ことハ
只元日とつふ少て物日ハ年の元月の元日の元ことハ元ことハつ
○子日遊ハ正月初の子の日人〳〵野辺ニ出て小松とひくのみなら先ハ
和ことせ法ことりのうれ葉を路ひふ事うんこの義を生ことのかふ
子の日する中ことふ小松のうつ葉ふ世のたりふ物とひつまことき
此文ハ元日ふ初子の事〳〵〳〵〳〵

二寸巻方の真しろくしろく平元結のごとくにして式の射藝ふいあぐる三〇巻赤い竹巻の赤と巻う揃してわくひ物にする〇蟹八は色を法橋うゝ長一尺八寸厚八寸巻の色さ八寸六分面二寸六分巻巻中色を巻う巻の色色と色ら巻の色色と色ら巻の色色と色ら

正月五日　左衛門の尉藤原の知貞謹上石見の守殿

改年の吉慶御意ふ任せら被候ふ之條先以目出度く覺え候ふ自他の嘉幸千萬千萬

正月六日　左衛門の尉藤原の知貞謹上石見の守殿

○謹上　去ぬ元旦の吉法と云て万ずよろのこと低〜高代ふ人間ぶ〜のなり○石見ぶこれ中国の守ぶ〜正六位下に叙ぶ○被ぶれ大位ぶ昇ぶ叙ぶ時ぶ元旦の吉法と云て万ずと多つべ〜○左衛門の尉ぶ知ぶ叙ぶ六位上ぶ尉ぶ正七位上に叙ぶ者ぶ今吾校尉ぶ〜

○茅原ぶ人皇三十九代天智天皇ぶ八年始て内大臣藤原ぶ鎌足ぶ福ぶ〜〜〜ところの姓なり

改年吉慶被仰意仕候ふ

目出度覺ぶ候ふ自他ぶ嘉幸千万〜。

○改年　吉慶ぶ被ぶ仰意ぶ仕候ふ者ぶ新年のよろこびぶ〜〜ぶ目出度ぶ覺ぶ〜〜ぶ〜〜ぶ〜〜

百手の達者究竟の上手一両輩同道せ令む可き也但し的矢蟇目等ハ無沙汰憚て入り候ふ

一種一瓶者衆中の課役賭引手物者亭主の奔走歟内内御意得ら被可し萬事物息之間一二ふ及ん不併面謁之時を期し恐恐謹言

正月六日　石見の守中原　謹上源左衛門の尉殿

究竟上手　百手達者

矢蟇目　沙汰憚入候

○百手達者とハ百箭の矢と百发射に一矢もたがはさる者双の射手をいふ○究竟上手とハ公方の手ならひ○的矢ハ甲矢乙矢あり色と作りの矢と射ハ其射者ハ続者指ハ當矢と平矢をいふ○的矢ハ的の矢ふ日し一尤的と射ふ日ハ的の矢のあるとそ○蟇目ハ指のかうもさ七寸ハ中の本とそ低り二寸に穴と穿し蟇の目ふ彩る箭ハ的矢ふ日し一尤右目ふ作りたふ法麁と除くの具うと礼和練ふ習ひることたうり

文意　射術の妙手と一人二人とりうひ家ぐくの的矢蟇目ふを容易ふ習ひ得ぬるものなれとこのうせたり

一種一瓶

課役賭引手物

亭主の奔走歟内内御意得ら被可し萬事物息之間一二ふ及ん不併面謁之時を期し恐恐謹言

○一種ハ者一瓶ハ酒のの○賭引手物ハ銭子ふ紙等ハ

ハ中の新いかれを射猪ら方ら褒美の品○者ハ

文意　酒者ハ客の座中ふ出ふ盛美の品

正月六日　石見の守中原

謹上　源左衛門の尉殿

○中原ハ外記局の氏姓十市高経文延二年十二月ふ外記と補し人数ハ外記代安寧天皇ふ二の子孫城陳光命乃後なり

面拜之後中絶良久
く遺恨山の如く何
乃時う意霧を散じ
可けん哉併胡越を
隔つるに似とう猶
以千悔千悔

抑醍醐雲林院の花
濃香芬芬として勾
已盛也嵯峨吉野の
山櫻開落條を交へ
其梢繁し默止難き
者此節也爭徒然と
し而光陰を送らん
哉

面拜し後中絶良久遺恨如山何
時の數霧散可惜哉併胡越隔
千悔〳〵

○こゝ久しきこゝろ○こゝ霧ゆゑ〳〵こゝろ書に〳〵こゝろ○花盛いまだ不盛
古の花石松は和城の面の瘡ゝ百空と傳てこゝろ

文意 和尚えゝ
後浄が久く中絶せしこゝろ越方の恨つりて數〳〵嵯峨とてこゝろ云ふこゝろ
こゝろ重てこゝろ〳〵べき花てもこゝろ花盛の事
と傳てこゝろ和尚してちに恨〳〵こゝろ

抑醍醐雲林院
花濃芳芬〳〵旬已盛也嵯峨吉野
山櫻開落交條と梢繁繁止ん
難者此節也爭徒然と光陰を送らん哉

○醍醐寺 林院すくな

雲林院の花

花の下乃好士諸家
の狂仁雲の如く霞
に似とう遠所之花
者乘物僮僕合期し
難し先近隣之名花
歩行之儀を以思ひ
立つ事か候ふ左道
之樣為りと雖異體

山城吉野の花の名所なり
○白已盛と花濃芳芬〳〵こゝろ
吉野の大和花も赤ぶなのこゝろ
こゝろ花〳〵こゝろ○嵯峨は山城
八月日の事とこゝろ

文意 醍醐寺林院の花も名所やうこゝろ
りて今の花盛こゝろ嵯峨吉野の山櫻も寄ると成こゝろ
こゝろ有と雖か南北の意中に初に紙を打るこゝろ
きこゝろ孫が伝として流か月日成すぐべきやこゝろ

花下
好士諸家狂仁如雲似霞
乘物僮僕合期難
左道之樣為りと雖異體
道と和歌雲霞明滅日已盛

之形と以明後日御同心候ゝ者木望也

連哥の宗匠和歌の達者一両輩御誘引有る可し其次と以詩聯句之詠同く所望ゝ候ふ破籠小竹

作者不定

○花下好士〳〵ハ花に心を移し〳〵ハ花に心を移し〳〵ハ花に心を移し

二月廿三日　彈正

の忠三善

謹上　大監物殿

是自申さ令めんと欲する之慶遮而恩問ふ預ア御同心之至ア多生之嘉會也抑花の下之會の事花鳥風月者好士之學ぶ所詩歌管絃者

嘉齡延年之方也御勸進之躰本懷ふ相叶ひ候ふ者哉

後園庭前之花濱山叢樹之櫻誠ふ以開敷の最中也若今明之際暴風霖雨有ら者無念之事也同く者片時も急き度く存せ令ひる所也

二月廿三日　彈正

謹上　大監物殿

○不昊ハ仆学集ふ学衣裳の義ふ〜〜〜

和歌者人丸赤人之古風と仰ぐ〻雖未長歌短歌旋頭混本折句省冠之風情輪廻傍題打越落題之躰を究め未

○後園八洲の産産安八泰の産源山八芝死山叢樹八樹の義うひ〻しくとふ花蕚の主うつ 文意 折句 冠句 旋頭 輪廻 傍題 打越 落題

柿本人丸赤人

歌旋混本折句省冠風情輪廻傍題打越落題之躰

○人丸八天皇表押人命の後性八柿本打続文武の二帝ふ仕〻し〻人〻○赤人八山部氏正六位上宮内卿赤麻呂祖父の氏の人ときこゆ〻ふ上世の歌仙〻○長歌短歌八旋混匿〻〻〻

詩聯句者菅家江家之奮流と汲ミ作更小序表賦題傍絶韻聲之質と忘れさり頗猿猴之人ふ似さるゲ如く螢火之燈と猜ひふ同じ然而人數の一分に召し加へら被者殆後日之恥辱と招く可し

執筆發句賦物以下才覺未練之間當座定めて赤面ふ及ぶ可き歟聊用意有る可き之由承り候ひ訖ぬ形の如く稽古致す可し公私忙之間毛舉ふ遑ら不恐恐謹言

人名赤人ゐとの古えすぐ〳〵成　そびろふをうふて　侍孤句ふ

ゆ汲菅家江家と蕉流文兵序表

絶頗猿猴似

人同螢火猜燈

恥辱招可

（注）侍孤句ハ苦の名ハ孤句ハ苦の単し七苦とすべて四苦と指ス

文ハ菅家江家の蕉流と汲しつゝもと格式とく忘れれ実ふ猿猴の

類しと人の姿ふ似螢火の光撒しと燈火とうらやしくそふまうり

恥辱ふつゝうる歟身と古人の人数ふ加へれんふハ他の笑種とうりて汲の恥辱

とりうんと

執筆發句賦物以下才覚未練

すべて百十と類と指ス歟ハ苦の単し七苦とすべて四苦と指ス

文ハ菅家江家の蕉流と汲しつゝもと格式とく忘れれ実ふ猿猴の

類しと人の姿ふ似螢火の光撒しと燈火とうらやしくそふまうり

恥辱ふつゝうる歟身と古人の人数ふ加へれんふハ他の笑種とうりて汲の恥辱

とりうんと

当座の及赤面猿猴乃用

定めて承り出形稽古私

恐恐謹言

毛挙遑ら汲ふ

（注）執筆ハ連歌の数場の名〇歟物と者一名

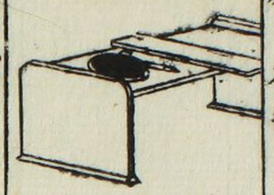
猿猴ハ猿の場出ふ猿ふ何ふ〇出くとうふ毛ハ中ふ無わ毛ハ毛ハ

物ふ物ふ名目と〇毛ハ祝儀紙ふと指しるとうふ

べし〇警句ハいろ〳〵人達のうし出れる歟と云警ふ〇毛挙

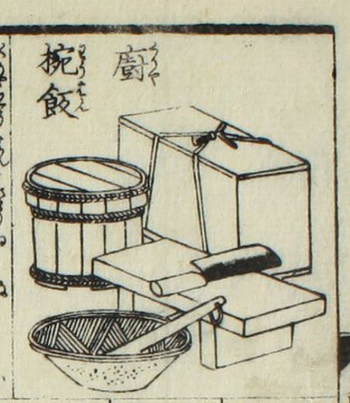
二月廿三日　監物丞源謹上　彈正の忠殿　御返事

執筆



祝言今于於者事奮ア候ふ〻雖猶以珍重珍重慶賀日と追ふて重疊家門年と迎ふて繁昌に自他際限有る可〻ら不早く參賀せ令ひ可

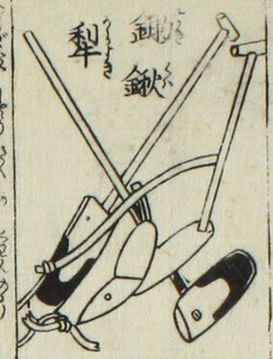
文意　拙筆数日紙物を修のゆゑにすべて才覺未練のあさを席小帳〻〻〻



廚椀飯相違無く者早く沙汰人等に課せて地下の目録取帳以下の文書濟例納法之注文悉召し進せら被可き也容隱之輩隱田之族ハ罪科の爲ふ交名を注進せら被可し

○傍ら八紘を掩に為る様うう田地ハ椀ゐど折て際目と分つもの〜〜
○汁ハ南ハ西ハ東西の名筋うう田畑の名〜も市中の働ハ〜〜混
乱ハすぐてみぐ〜〜〜〜〜○精進の際に廚を為るとつふ○沙汰ハ〜〜〜〜〜び
ところ〜〜〜〜沙の兼ハ〜〜〜〜〜

て堤井溝を修固す可きも也



佃御正作之勸農ハ迫地を除き熟田を撰ひ急ぎ種子農料を下行せ令め鋤鍬犁等の農具を促し粳糯早稲晩稲等を耕作せ令め西收の期ハ稔を待て春法の既

ねんぐ民之役の儀固堤井溝迫〇耕作業

ハ耕作のもとゐハ農を指しそのハ農業生の時を耕作のもの

始めゆゑ水ハいて了〇腴迫腴ハ肥るる地迫ハせぐく疲るる地を指ん〇

開墾ハ地を開きて新田を墾くく〇耕水ハ田地ゆゑく〇耕水ハ田地ゆゑく

文意 耕作

のものハ墾て為る旱年と相乗し地の腴迫を作るを乗るゆゑ勢ひる

ハ地ハ地下人ハ金を堤井溝を修し固めるく

佃御正作之勸農除迫地撰熟田乗合

下行種子農料促鋤鍬犁等農具

令耕作粳糯早稲晩稲等早稲西收

期乗法既得

〇佃御正作ハ地の田を百姓ハ作

り為て乗るるとゐ〇勸農ハ

次ハ畠の事蕎麥大豆小豆大角豆粟麥黍稗等畑山畠之乾熟ハ隨ひ乗代加地子を課し可し毎年實檢を遂ぐる之節敢以自由之依怙を存す可らず不得と願ハ可し

西收の期

若ハ荒ふるを云ふ〇西收ハ秋ハ田を刈納る候を

秋と指せる為ハ秋の方くおの系作業ハ茅しといふ〇蕎法既は

ハ稲を収め物撰ハ物ゆゑ納ぐるるの既ハ物ゆゑ納ぐるるの

いるるべし

文意 上の出田を作るハ迫地を除け熟田を吟味

しとよく種子や農料とハ作ひ平の農を紙て百姓をそ

ら也穀物既ハ荒う秋刈入る候ハ法のくく泥米ハ米るど麥

迫ハ納方のるるべき

次畠事蕎麥大豆小

豆大角豆粟黍稗畑畠

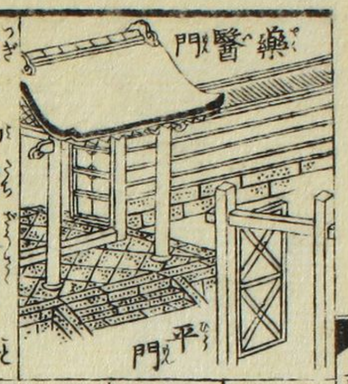
之乾熟ハ隨乗代加地子迫毎年實

檢之節敢以不存自由依怙〇畠

ハ園

うう菜と種る也〇畑ハ火田うう荒地の系芝と焼きを灰を糞

うう種と蒔く〇畑ハかうく疲地とう〇熟ハうくわるるよき



次ハ御館造作の事
各別之作事有る可
らず

奉行早く四方ハ大
堀と構へ其内ハ築
地と用意す可し棟
門唐門者斟酌之儀
有り平門上上門藥
醫門之際ハ於之と

地とし○築代ハ畠の畔ハ築と樹て養蚕の料とする也地代ハ
○加地子ハ年貢の外ハ納むる地子なり○実検ハ田の苅
よう毫の多少と吟味して年貢の員数を定むるをいふ○依怙ハよ
りこのひとに和して員数を減ずる
ち地にようて実入の多少あれバ其ハ難ようしる地と考へ
又築の地代加地子なども命ずべし毎年実検する者ハ敵と私の計
ひ出ずべしと

文意 蓄麦以下稱ずるとの数ハ

次御館造作事有る可

作り○御敵ハ敵の家の屋敷なり○造作ハ普請のこと

次に御敵と作ることあるべきほどあらかじめ築うべき所なり

文意

奉行早く四方ハ大堀を構へ其内ハ築地と用意す可し棟門唐門者斟酌之儀有り平門上上門藥醫門之際ハ於之と

相計らふ可し寝殿
者厚萱葺板庇の廊
中門渡殿者裏板葺
侍御厩會所圍爐裏
之間學文所公文所
政所膳所臺所贄殿
局部屋四阿屋桟敷
健兒所者葺萱葺ハ
支度す可き也

檜垣
透垣
柴垣
板庇
渡殿
唐垣
築垣

相計らふ可し寝殿者厚萱葺板庇の廊中門渡殿者裏板葺侍御厩會所圍爐裏之間學文所公文所政所膳所臺所贄殿局部屋四阿屋桟敷健兒所者葺萱葺ハ支度す可き也

檜つくり垣ハ丸棟なり板屋ハ
ハ横木なり○上ハ丸棟なり
當ハ上平なり板の地面ハ赤土
なり○ハ上り○渡殿ハ板葺
葺なり○板庇ハ庇ぶうにて地を出さず
芝敷ようなり後度ハ廊下ハ○渡殿と
廊下ハ○上ハ方ようなり○築あげる門と○築
地ハ赤土なり○渡殿ハ板葺なり
ハ丸棟なり○板屋ハ板葺なり
ハ板葺なり○築地ハ土塀と○檜門ハ
ハ板屋なり○平ハ扉の上
ハ板屋なり○

文意 ○渡殿ハ廊ハ板葺なり○板庇ハ板葺なり○築地ハ土塀と○檜門ハ板屋なり○平ハ扉の上

南向ふ者笠懸の馬場と通し堺と結ひ今も同く的山と築く可し東面ふ者蹴鞠之坪と構へ四本懸と植ゑ泉水ハ枯山遣水ハ眺望ふ任せ方角ふ隨て禁忌無き之樣之と相計ふ可し

南向ふ通笠懸の馬場

今結堺ふて築的山東面ふ蹴鞠之坪を構へ四本懸を植ゑ泉水ハ枯山遣水ハ眺望ふ隨て方角ふ禁忌無き樣之を計ふ可し

○結ふハ綴ふと訓ふ○ふハ屋ふ○今の字ハ今ふ○ふハ屋ふ○客殿ハ進上物を例ふ○四阿屋ハ屋根をいふ○裏ハ方に樣ふ屋といふ薪材ふ類ふ○○

【文意】客殿ハ物ふ人の居ふ○佳児ふハ仲居ふ者ふ○

よく居ふして曰方に大勢と飛ふ手に嫁を抱くふ○ふがまへ方ハ

孫門唐つふハ拙ふ中の所門ふ新して探あれば平つふ中のうちを用てそこ

らふべしを樣のうちとそ

文ふふ文秀中ふ○きふ○

南向ふ通笠懸の馬場

今結堺ふて築的山東面ふ蹴鞠之坪を構へ四本懸を植ゑ泉水ハ枯山遣水ハ眺望ふ隨て方角ふ禁忌無き樣之を計ふ可し

○笠懸ハ正月、進物ふ人ふ○○堺ふ結ふ乃ふ結ふ○的山ハ的を掛る場ふ○蹴鞠ふ

客殿ふ相續て檜皮葺の持佛堂禮堂を立つ可し菴室休所者先假葺也傍又土蔵文庫を構ふ可し其中閑ハ屏也後苑の樹木四壁の竹前栽の茶園同く調へ殖ゑ可き也仰せ下さ被る之條條怠慢無く勤仕せら被者忠賞せら被可き之旨仰せら所候ふ也恐恐謹言

客殿ふ相續て檜皮葺の持佛堂禮堂を立つ可し菴室休所者先假葺也傍又土蔵文庫を構ふ可し

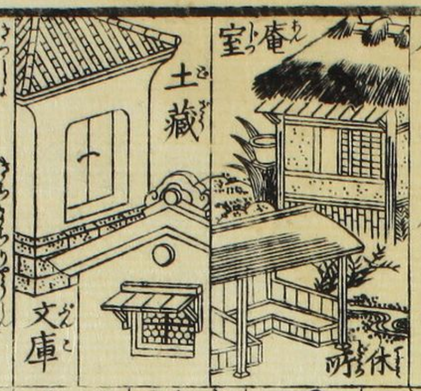
○客殿ハ家人ふ○あひ

○檜ふハ○ふ○檜ハ檜ふ○ふ○檜ハ檜ふ○ふ○檜ハ檜ふ

三月七日　玄蕃允平　御政所殿

仰せ下さ被る條條具ふ以承り候ひ畢ぬ聊等閑と存じ可べ〻〻不候ふ也抑御下文御教書嚴重之間入部の使節異儀無く彼所ふ莅て導

行せ令め候ひ畢ぬ



吉書ハ吉日良辰を撰行せ令ひ耕作業の最中也地下の文書の事或紛失或失墜錯亂之由沙汰人等搆へ申ひ依て延引之條恐れ入り

○玄蕃允六位之唐名ハ孫蕃ハ孫之婿子大学ハ孫子ハ孫也ハ孫ハ孫ハ孫

候ふ事之實否又土貢の員數等尋ね捜り追て注進申す可きも也

次ふ作事者桁梁柱長押棟木板數の材木者虹梁爲る之間刈取の爲に誂へ令め候ひ畢ぬ門の冠木扉の裝束唐居敷の板鼠走方立雲臂木懸魚蟇俣の木并に鴨柄鳴居垂木木舞破風關板飛檐の

入事之實否又土貢員數不易捜

追可中注進也

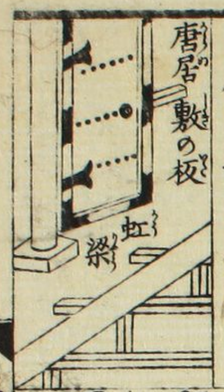
○右之文ふハ入紙ニてそれ〳〵ひて民百性ゟ出ス注ニ之ゟ上○右日ニ辰ゟ巳辰ハ

次作事者桁梁柱

長押棟木板數材木虹梁爲之間

刈取爲誂令候畢門冠木扉裝束唐居敷板鼠走方立雲臂木懸魚蟇俣木并鴨柄鳴居垂木木舞破風關板飛檐の

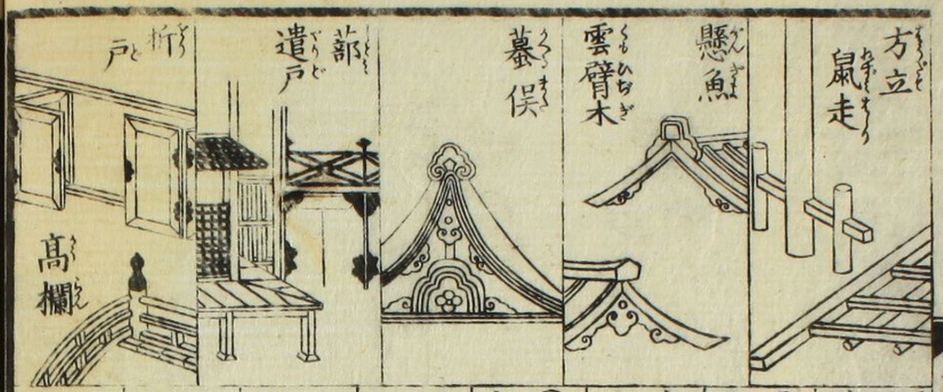
角木縁の短柱貫の子唐垣透墻柴垣築墻檜垣杉の障子廚子連子蔀隔子遣戸妻戸織戸決入高欄宇立杈首足堅天井の縁障子れ骨棟樋組押の博襲の木檜曽水門葺地の具足者津湊ふ於之と買ハ令む可〳〵



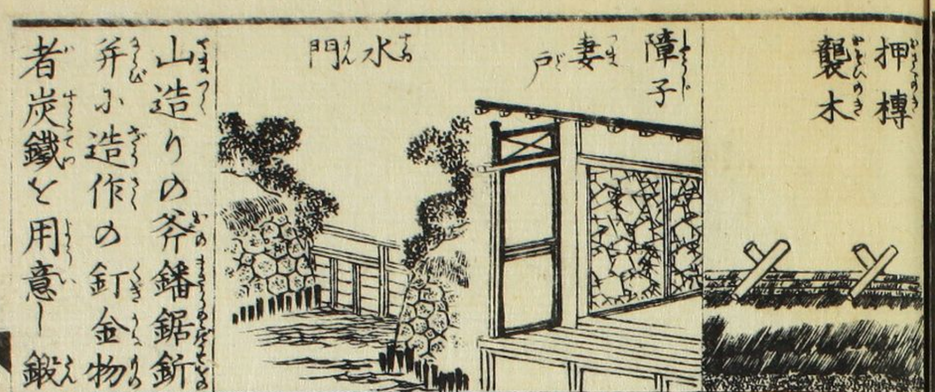
角木縁短柱貫子唐垣透墻柴垣築墻檜垣杉障子廚子連子蔀隔子遣戸妻戸織戸決入高欄宇立杈首足堅天井縁障子れ骨棟樋組押博襲木檜曽水門葺地具足者津湊

可令買之

○杉屋の撲木○梁ハ株と爲ふりの○七押ハ乳鳩ク鴨柄の上ふりの撲木○株木ハ屋脊の



柱○江梁ハ梁の上にそゝくて横くゝ方の形くゝる木○松皮ハ材木皮
葺ホとゝやう切出したる○門冠木ハ柱の上ホ横くゝ冠木のやうに
○扉ハ蟇俣ハ打くゝし釘具数扉の作く○扉岩戸板ハ門の左右柱の
下にわる蟇俣のくゝ柱とゝふ○嵐戸ハ柳より長く作り付る○
方立ハ板くゝ門の丸柱の内面に立て扉を付る角柱とゝふ○石階木
ハ柱の上に横木横くゝ木と称るりのと桁とゝふそれホ重桁と書こうくゝ
○鼠走ハ格柳の蟇俣ハ破風の下に付る物横柳の
蟇俣○懸魚ハ横く懸の寄に垂くゝ木○木鼠ハ梶く横の端ホみこ
て塗ホ東くゝ木○破風ハ棟の蟇俣ホ向ふ○翼板ハ破風ホ付くゝ
○花懸角木ハ屋根の口深くゝ付る大極く○縁瓦ハ縁のつゝ
ちとゝめる柱く○翼子ハ妻ホ竹と縁て布くゝ今ゝ板と称ふ長城
林板とゝふ○庫垣ハ白要の移り塀く○透塀ハ竹とゝかくゝ
○柴垣ハ柴と組くゝみくゝ○築塀ハ土て築あげくゝる塀くゝ
ともゝふ○板垣ハ板と組くゝ○板塀ホハ今ゝふ板戸のやうく
○厨子ハ仏像と数置する横仏龕のやうに○連子ハ櫺ホく窓の端ホ
とゝふ○菊ハくゝあくゝ元昌と長ひて長を作るりのく作よひづ



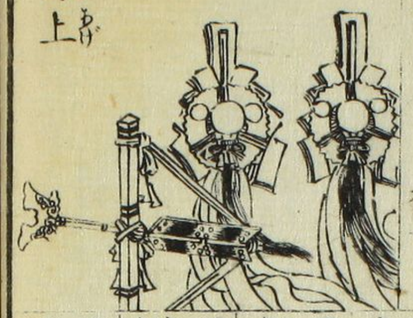
くゝ○ゝふ○簡子ハ今ゝ書く本て組る竹の大なりのく○半戸
ハ左右くあけくそする戸く○書戸ハ屋の端ホ作る戸く○繊戸ハ蝶
鉸と付て扱ホ書ホ作くゝる戸く○決入ハ板とそぐに下ホ入極
と刻り一方ハ薄のごゝく奴と付てそぐ合ハとゝふ○
ゝ棚ハ棚棚く○宇立ハ横く梁の上に立る短く柱く○牧首ハ小ゝ柱の下
にあるつゝ本く○豆束ハ牧首の下にわる縁ぐの柱く○天井縁ハ縁縁廻
縁ホく○障子ハ今の唐紙のやうく○格子ハ今の唐紙のやうく○格子紙ハ格の上に通ホ極と
ゝふ○押板ハ柳瓦の新樓本ハ紙本の数ゝふ上代の屋谷ハ
ゝる茅葺ホて茅ホくゝるりのホ瓦押のくゝホ瓦紙本と色くゝる
ゝて社ホ本張ぐゝる○板葺ハ板ホ瓦ホ瓦紙本と色くゝる
用いらくゝとゝふ俗一名ハ葺ホ作くゝる○ホつくゝれわきのホ元
○青地ホ足と屋根半代ホ用ホ瓦ホ板ホ○津湊ハ流ホの書ホ出
入と交易船ホ作くゝる物ホ作くゝる物ホ作くゝる門冠本ホ下の物本ハ如果
ゝる物ホ作くゝる物ホ作くゝる門冠本ホ下の物本ハ如果
ゝる物ホ作くゝる物ホ作くゝる門冠本ホ下の物本ハ如果

文意 次ホ彼他ゝのゝ形梁ホ下の物本ハ如果

山造りの斧鑿鋸鉞
并ホ造作の釘金物
者炭鐵と用意ー鍛

山造斧鑿鋸鉞并造作釘金

冶弐召し居る造ら
令め候ふ也木工の
寮修理職乃大工ふ
仰せて巧匠を召し
下さ被新立礎居柱
立精鈍棟上之吉日
者陰陽の頭ふ課せ
て定め下さ被可し



棟上

物ゝ用ゝ之度弐拾弐拾弐拾弐拾弐
作木之寮修理職大工被下巧匠
新立礎居柱精鈍棟上之吉日
課陰陽頭ゝ定下

○斧ハ俗ふいふきのゝ
○鋸ハ和名たのきりゝ又
○新ハ本紙
○鋸ハ本紙ハ木ゝ材ゝ仕ゝ
○本ゝ寮
造ゝ○鍛冶ハ鍛字ゝ○本ゝ寮
寮の沙汰ゝ○修理職寮名ハ匠作ゝ内裏ハ修造乃寮
工匠ハ工ゝ○大ハ工匠の沙汰ゝ○巧匠ハ巧の大工ゝ
以家ゝ○鍛冶ハ沈鍛めゝ也柱下のゝ

次ふ樹木之事梅桃
李枇杷杏楊梅柿栗
梨子椎榛柘榴棗樹
淡柚柑柑子橘温州
橘金柑柚以下心之
及ふ所尋ね殖ゝ令
め候ひ畢ぬ尚御日
記を以仰せ下さ被
可し申し入る可き
子細候ふと雖御領
田堵の土民名主荘
官等野心を存する
之間條條未落居せ
ず候ふ責伏せ之後

○稽鋸ハ仕上の鋸ゝ
○法師ハ法師ゝ○稚ハ若ゝ
後世二家に分れて文盲ゝ
俗りの乃ゝ打るゝの
本ゝ寮使職文弐下の稚業に命けられ
ゝ大工ゝ業ハられ
ゝ時若ハ用ふべき日ゝ法師の司にゆて
○稚ハ若ゝ紙ハ若ゝ
○柱ハ紙ゝ

次樹木之事梅桃李枇杷杏楊梅
柿栗梨子椎榛柘榴棗柚淡柑柑
橘子橘温州橘金柑柚以下心之
及ふ所殖ゝ畢ぬ日記ゝ以仰下
法師ゝ入子細ハ田堵ゝ民

文意

参上と遂げ申し入る可き之旨披露し給ふ可き者也恐恐謹言

石見左衛門尉殿

長尾兵伏左衛門尉殿

○樹子ハ小し樹勢の悪敷ものと今樹るとも〻の〻ハ悪樹ハ似て小きものと〻ふ○橘ハ密樹のものゝ〻ハ色橘のものゝ〻食樹の大なるものハ仏〻〻○温州橘温州ハ唐土樹橘の名なり〻を稚と作て〻るものハ○食樹ハ作ふ〻ちぐるゝ〻〻○柚ハ作ふ〻ちぐるゝ〻〻○五郎田地ハ田地ハ濃〻田地ハ〻〻ふ義にて〻〻ハ作ふ〻者〻〻田地とりて〻る百姓〻〻○〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻○〻〻〻〻〻〻〻〻〻〻

の業繁きハ仁政之甚きゞ致す所也賞罰嚴重ふして人之堪否と知と理非分明にして物之奸直と糺ス者萬民の歸する所也心ふ寛宥之扶と存し強て其侘際と好まゝる者所領靜謐之基也毛と吹て過怠之疵と求む可らゝ不

仁政之甚所歟也寛宥嚴重歟

之堪否知理非分明好惡方

民不過也寛宥之扶毛不好

其侘際之靜謐之基也吹毛

不求疵毛底

○黎民ハ生民之ことゝ○約多糧

黎ハ約食多糧と訓く糧ハ

ざるとゝ民家ハ安んずるこゝろふかくして人ハ糧こと

ハ民の富ハ稼ひふくらむ○其所業ハ家業ハ家作より而收まりくる

生業の富昌ふるとゝ○賞罰嚴重ハ賞ハ褒美と罰ハ懲罰と

罪ふ重ふ罰ふ重ふの罰ハ懲しめるとゝ○堪否ハ堪ハ能ふと否ハ不能

ふとゝ○侘際ハ侘ハ貧ふと際ハ交ふ○靜謐ハ靜ハ安ふと謐ハ

ひとしくしてせうくせうくしてせうくせうくしてせうくせうく○侘際ハ

○寛宥ハひろくゆるすとゝ

狩山

川狩漁捕

凡先日仰せらゝ被る市町ハ興行廻船著岸の津并ふ狩山漁捕河狩野牧乃事定て遵行せらゝ被る歟市町者辻子小路と

就繼の法ふ云と失し法ふ云と就ふ云と弟桜ふ云ふ

文ふハ物ふ偽国て云と疲変ふ云とゝ○吹毛求疵と云ふ毛の縫

の出来ふくゝ後撰集ふ詠内親王の歌ふ吹ふ毛ふ疵ふ求ふ

ゝ故ふ云ふ○紫門と書て不審ふ紫の條ふ出ふ紫ふ出ふ民百姓の

ふ云ふ振ひ動ふ云ふ○雲霞繚乱ふ雲ふ霞ふ繚ふ乱ふ雲ふ霞ふ

の乱ふ疲ふ嘆や吾ふ嘆ふ乱て理と非と分ち明と糺し

明ふ分ふ理ふ非ふ人ふ分ふ明ふ糺ふ明ふ○紅人と稼者の表ふ仁者と云ふ○紅人ハ

ハ紅内と稼者ハ表ふ仁者と云ふ○紅人ハ紅内と稼者ハ表ふ仁者と云ふ

凡先日被仰市町興行也

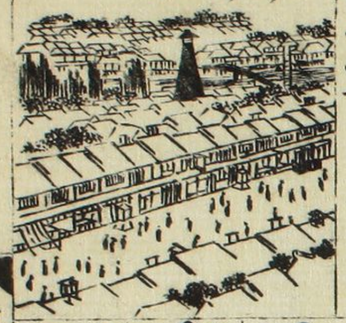
孤孝津并狩漁捕河狩野牧

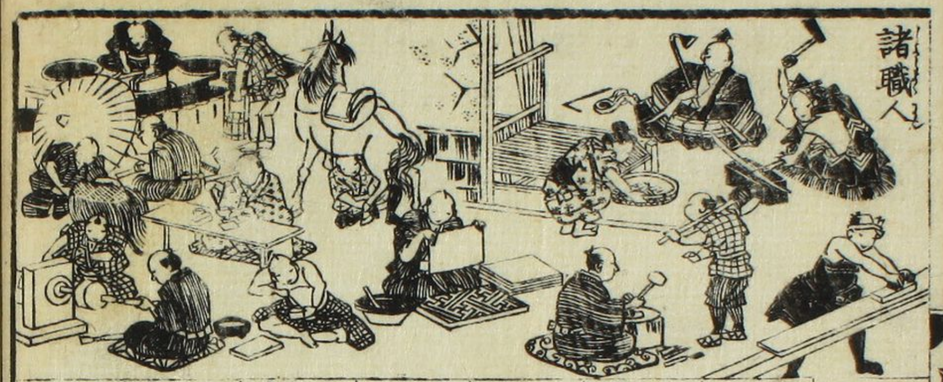
乃事定遵行せらゝ被市町者辻子小路

通し見世棚を構へ
令め緞布之類贄の
菓子賣買之便有る
の様相計らハ被可
き也

招き居め可き輩者
鍛冶鑄物師巧匠番
匠木の道并小金銀
銅の細工紺掻染殿
綾織蠶養伯樂牧士
炭燒樵夫檜物師轆
轤師塗師蒔繪師唐
紙師紙漉傘張蓑賣
廻船人水主揖取漁

客海人朱砂白粉燒
擂引烏帽子折商人
沽酒酢造弓矢の細
工渓草の土器作葺
師壁塗獵師狩人猿
樂田樂獅子舞傀儡
師琵琶法師縣御子
傾城白拍子遊女夜
發之輩





紺屋〇染屋〇張屋〇漆屋〇鞍置〇鍛冶〇
鑄物師〇鍋釜〇鋳物師〇鋳掛〇
鋳師〇鋳物師〇鋳型〇鋳造〇
鋳造師〇鋳造〇鋳造師〇鋳造〇
鋳造師〇鋳造〇鋳造師〇鋳造〇
鋳造師〇鋳造〇鋳造師

の宗匠管絃の上手
引聲短聲の聲明師
一念多念の名僧檢
斷所務の沙汰人

士族管絃上手

聲明師一念多念名僧檢斷所務

沙汰人

法隆師八三月五日ハ十四、摺縫物師、衣裳の摺
縫繕ひする者なり○武藝ハ弓馬劍術ハ武士の
傳ふる○律宗ハ道場者の法流日本にて浅草聖天院の
傳ふる○律宗の道場者ハ義の法流日本孝德天皇の御宇
勅して伝ふる○真言宗ハ法華ハ天台宗ハ本の傳ハ最澄
上人建立ハ法華ハ天台宗ハ本の二流あり○顯教ハ大小乘に
真言ハ天台宗と真言大師の法流日本にて桓武天皇の御宇
伝ふる○高野ハ真言宗ハ弘法大師の法流日本にて桓武天皇
の御宇に流入あり○古義新義の二流あり○学生及ハ堂
同じく流入の者にわかれ○修験ハ出羽ハ羽黒の系流
とて伝ふ二流あり天台宗と真言宗と○勤行要傳

清書草案の手書真
名假名の能書梵字
漢字の達者宏才利
口の者辯舌博覽の
類庭給仲人等尤大
切也屑有る之族を
招き居る公私之役
ハ召し仕ふ可し毎

ハ行力暦図ふして夢物あり○夢ハ人ハ夢ハ物ハ
時合利井ハ夢慧牙ハ夢の夢○上人ハ内ハ法華ハ
ふあり○稱ハ○紀典ハ年紀史記法華ハ歴代の典籍と云○伝經ハ乃經
仏術の書ハ○ハ法華ハ法華ハ仏教ハ法華ハ法華の法華と云ふ○ハ
經学ハ經ハ学ハ経ハ学ハ学者ハ
ぎと○汚秘ハ經家道法ハ二月の快晴あり○夢龍堂夢ハ師ハ
龍ハ夢ふ名ハ夢ハ夢ハ夢

事後日を期し恐恐謹言

卯月五日前の采女の正中務の丞殿

後日恐惶謹言

○清出ハ本紙○筆蒙ハ下云○表ハ正書○表字とは○裏字ハ表也○紙ハ筆也○はは文字と指し○紙ハ表也○裏字ハ表也○裏字ハ表也○裏字

京の町人濱の商人鑓倉の誂物宰府の交易室兵庫の船頭淀河尻の刀禰大津坂本の馬借鳥羽白河の車借泊泊の借上湊湊の替錢浦浦の問丸同く割符を以之と進上し叡載に任て之と運送し

次小大舍人の綾大津の練貫六條の染物豬熊の紺宇治の布大宮の絹烏丸の烏帽子室町の伯樂手島筵嵯峨土器奈良刀高野剃刀大原

寄季之交易室兵庫船頭淀河尻刀禰大津坂本馬借鳥羽白河車借泊泊借上湊湊替錢浦浦問丸同割符進上任叡載

○宰府ハ宰式の二役く○陸時ハ陸役ハ不時ハ臨時ハ常役ハ年貢ハ年の年貢ハ年貢ハ年貢ハ

の薪小野の炭

小野炭。○大舎人ハ京の名苔舎人の炭ふの臣より○文津の名ゆゑ以て絲ゝ〻る絡ゝ〻る宇治の布毛ゐ山城十種の内絹物く○爲光ハ法眼し荀庵ちの鳥氏ゝ北ふ巻て烏帽子を作ゝ出せゝ名物とゝや○宮町ハ法眼し伯乗ハ朱考○文治延ハ稼物十種の一ゝくゝを○法眼ち宮ハ内裏ゝ百法ゝ憂ゝ人爲帽子上下ゝて奉る○京ふ百ゐ文殊ゐ奉とゝふ名瓶法師ゐ物ハ紀州ち母ふの藁ゝ

ゝ名物とゝや○天系藁ハ交治元年平家滅亡の法達れつ流ゝ北殊光流

小系布ゝ〻ひゝ〻ゝ紀河波門伝ゝ〻せのいゝゝゐ〻に奉ゐて藁ゝて奉られ

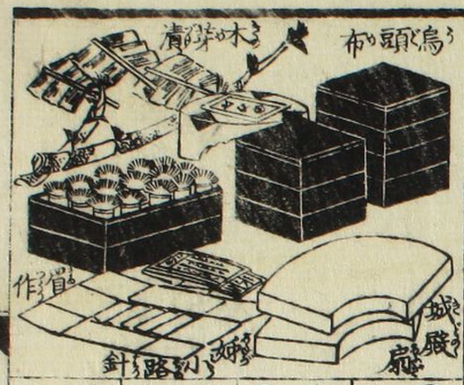
ゝ名物とゝや○小杜宮炭ハ丹波の國小杜の細川とゝふ所ゝいつゝかゝ

小柴信濃城殿扇

仁和寺眉作姉小路の針鞍馬の木芽漢

硯胡爲ゝ布東山の心太

此外加賀絹丹後精好美濃の上品尾張八丈信濃布常陸紬上野綿上總鞦武藏鎧佐渡沓伊勢切付伊豫簾讃岐圓座同く檀紙播磨杉原



加賀絹丹後精好美濃の上品尾張

八丈信濃布常陸紬上野綿上總

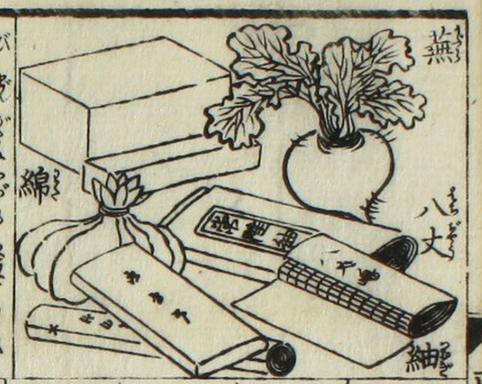
鞦武藏鎧佐渡沓伊勢切付伊豫

簾讃岐圓座同く檀紙播磨杉原

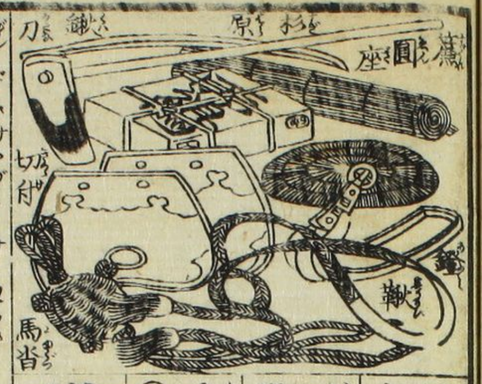
○小柴ハ紀の地名とゝ〻でさゝ〻ゝ〻ぐる〻ゝ〻ぐ紫ハ眉と畫く事く○城殿ハ紀の名ゆゑ上の系ゐ老町ふ所ゝ法眼ゝ〻ぐ○仁和寺ハ眉作ハ城物ハ山にあゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ

○姉小路ハ丹ハ古京ふ平ゐ尾ゝち作て手業ふ眉を作れゝ〻ゝ

せゝ〻ゝ〻ゝ内紀の五位ゐ名ゝ〻ゝ〻ゝ〻



備前刀出雲鍬甲斐の駒長門牛奥州の金備中の鐵越後の鹽引隱岐鮑周防鯖近江鮒淀鯉土佐材木安藝の摶餅登釜河内鍋



備後酒和泉酢若狹の椎宰府の栗宇賀の昆布松浦の鰯夷の鮭奥の漆筑紫穀或異國唐物高麗の珍物雲の如く霞ふ仕さり

雙魚市場

備前刀出雲鍬甲斐駒

備中鐵越後鹽引

隱岐鮑周防鯖近江鮒淀鯉

土佐材木安藝摶餅登釜河内鍋

○備前刀は長船の打物と○出雲鍬は八束郡と仕ふ始めと○甲斐駒は武田氏の産むと○長門牛は代田氏の産むと○奥州の金は平泉と○備中鐵は山田と仕ふ始めと○越後鹽引は佐渡と○隱岐鮑は天皇の御食物と○周防鯖は長崎と○近江鮒は淀川と仕ふ始めと○淀鯉は淀川と仕ふ始めと○土佐材木は畑と仕ふる山中より伐出す

備後酒和泉

若狹椎宰府栗宇賀昆布松浦

鰯夷鮭奥漆筑紫穀或異國唐物

高麗珍物雲霞

○備後酒は尾道の宿と生る○若狹椎は淺津山口若狹の産と○宰府栗は筑紫の篠栗と仕ふ一年に二度実のる○宇賀昆布は肥後の地○松浦は肥後の地○奥漆は奥州会津と生る○筑紫は筑紫の産と仕ふ○穀或異國唐物高麗珍物雲霞は筑紫の名産物と仕ふ

文意 次ふ結果の名物名産奥州の産物と仕ふ

交易賣買之利潤者四條五條之辻ゟ起過せて往來出入之貴賤者京都鎌倉ゟ異ら不凡御須豐饒ゟ而甲乙の人富有せ令め屋作家風尋常ゟ而上下已神妙也急き御下向有て高覽有る可き歟須く御迎ひの夫カ者と催し進ず可也恐恐謹言

四月十一日　中務

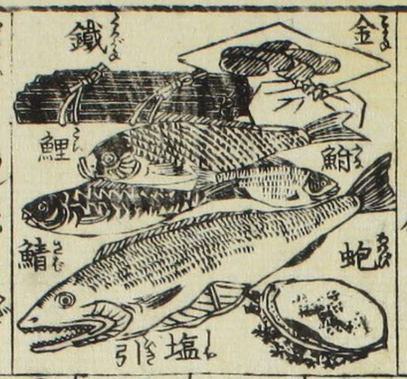
のごとく五條内ゟ元發

交易賣買之利潤者。四條五條之辻ゟ起過せて往來出入之貴賤者。京都鎌倉ゟ異ら不凡御須豐饒ゟ而甲乙の人富有せ令め屋作家風尋常ゟ而上下已神妙也急き御下向有て高覽有る可き歟須く御迎ひの夫カ者と催し進ず可也恐恐謹言。四月十一日　中務

文意　交易賣買の利潤と云ふ者の

の丞清原　進上

采女の正殿



良久く面謁を隔て積鬱山の如し何の日か濛霧を披うん哉面談ゟ非ずん者更ゟ之を謝す可ら不併參會を期し

町ゟ鎌倉へ出て往來する人多く振りまき嘲の地ゟ出て往來する人多く出て留まる所ゟ在住所ゟ近ひの夫カ者を催し進ずる也恐恐謹言

四月十一日。　中務丞清原。

進上　采女正殿

○清原ハ舍人秋まの孫ゟ舍人の子愛世ゟ始て名ゟ所の姓なり

夏井ハ左大臣双屋ゟ出て夏井ゟ藤ゟ

良人濁世稀世何日拔濁

霧收非世扶人實不所謝之侍期

來會。○世濁ハ濁世ゟ○稀世ハ稀ゟ世ゟ○濁世ゟ稀世ゟ何日ゟ拔濁ゟ世ゟ實ゟ所ゟ謝ゟ之ゟ侍ゟ期ゟ會ゟ來ゟ

抑關東下向の大名高家之人人路次之便を以打寄に可き之由内内其聞候ふ折節草亭見苦敷く資具又散散之式か候ふ也御扶持か預ら不人者今度の恥辱と隱し難し助成せら被者生前之大

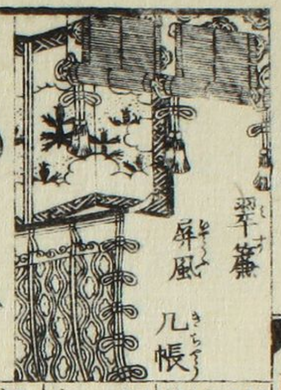
文意

ねふ〳〵〳〵〇面倒ハ扨舍ふて世話せすに〇御ハ後者

此外打銚子金色提
青漆の鉢茶碗の具
高杯懸盤引入合子
皿盞油蠟燭鐵輪以
下注文と進じ悉以
借預ら者使者と進
ず可く候ふ也

文意 此外打銚子金色提青漆茶碗具高杯懸盤引入合子皿盞油蠟燭鐵輪以下注文進じ悉借預ら者使者進ず可く候ふ也

○此外は外の字義し○凡惣は惣物の字義し○銚子は銚子の字義し○提は提子の字義し○茶碗は碗の字義し○高杯は高杯の字義し○懸盤は懸盤の字義し○引入は引入の字義し○合子は合子の字義し○皿は皿の字義し○盞は盞の字義し○油は油の字義し○蠟燭は蠟燭の字義し○鐵輪は鐵輪の字義し○以は以の字義し○下は下の字義し○注は注の字義し○悉は悉の字義し○借は借の字義し○預は預の字義し○者は者の字義し○使は使の字義し○者は者の字義し○進は進の字義し○ず可は可の字義し○く候は候の字義し○ふは不の字義し○也は也の字義し○此外打銚子は此外の打銚子の字義し○金色提は金色の提の字義し○青漆は青の漆の字義し○茶碗は茶の碗の字義し○高杯は高の杯の字義し○懸盤は懸の盤の字義し○引入は引の入の字義し○合子は合の子の字義し○皿は皿の字義し○盞は盞の字義し○油は油の字義し○蠟燭は蠟の燭の字義し○鐵輪は鐵の輪の字義し○以は以の字義し○下は下の字義し○注は注の字義し○悉は悉の字義し○借は借の字義し○預は預の字義し○者は者の字義し○使は使の字義し○者は者の字義し○進は進の字義し○ず可は可の字義し○く候は候の字義し○ふは不の字義し○也は也の字義し○此外打銚子は此の外の打の銚子の字義し○金色提は金の



五月九日左京の進平進上藏人將監殿

不審千萬之處玉章忽到來更ふ餘鬱を貽はしと無一便宜と以俳徊せら被者

六月九日　左京の進

進上藏人將監殿

○藏人お殿ハ正六位上ハ殿上ハ許す○左京進ハ官ハ正六位下ハ正七位下にハ許さ官名ハ京職司録といふ○平ハ天長二年菅原朝臣の姓を賜ふ文章ハ漢文ハ文章ハ文章ハ

不審千萬之處玉章忽到來更ふ

文意　白雲ハ遠くハ人一面ハ疎くして恨ハ重ハ

殿ハ殿ハ殿ハ

能米馬の大豆味糠
藁味噌醤酢酒鹽梅
并ふ初献の料ふ海
月熨斗鮑梅干削物
者干鰹圓鮑干蛸魚
の躬煎海鼠生物者
鯛鱸鯉鮒鱧王餘魚
雉兎鴈鴨鶉雲雀水
鳥山鳥一番

能米馬大豆味
藁味噌醤酢酒鹽梅
并ふ初献の料ふ海
海鼠生物者鮑干蛸魚
鮑干蛸魚雉兎鴈
鴨鶉雲雀水鳥山鳥
山鳥一番

○味噌ハ麦物ふ玄米のうすしき○
ふ大豆味噌ハ皆ふるの肉料く○
法梅ハ法漢の梅ふ玄ふ○梅干ハ古来ふ
六七寸形ふく金箔脆ふ
名ふく殺肉ふも色淡赤
て他邪ふ遠る○干鰹ハ鰹
鰹ふ○系鮑ハ金箔ふて

鹽有者鮎の白干鮎
乃黒作鱒ふ楚割鮭
の鹽引鰒の鮨鯖の
鹽漬干鳥干兎干鹿
干江豚豕乃燒皮熊
の掌狸の澤渡猿ふ
木取鳥醤蟹味噌海
鼠の腸鮒烏賊辛螺

鮎白干鮎
○鮎ハ白干鮎ふ
○薬海鼠ハ海鼠と
のうし○主鮑ハ
色鮑白うしてふ
と合ふて法鮑と
蓋割鮑ふ鰒と
実ハ赤ふ○水
いひうふ○一番ハ
鮎白干鮎
鮎白干鮎
鮎白干鮎

榮螺蛤蟶交の雑喉
氷魚等或買儲と或
乞索め之と進ぜ令
め候ふ猶以不足の
事候ハ者使者と給
ふ可き也恐恐謹言

螺蛤蟶交雑喉氷魚乾魚或買儲或
乞索之進令候不足事候
者使者給可恐恐謹言

○榮螺ハ貝殻ハ黒く内ハ白く肉ハ赤く味美ハ
ずるを海螺といひ海中に生ずるを海鹿といふ○蛤蟶ハ海
蛤ハ貝殻ハ薄く味美ハ冬ハ蛤と称ス夏ハ蟶と称ス○雑喉ハ
ものつり○乾魚ハ乾ものの肉と赤皆漬ものしる新ものし○儲ハ味噌ハ
醤の類を元て蓄ふ○ものるを儲○海鼠猫ハ海鼠の猫ハ海鼠の猫ハ海鼠
ものふ塩漬るハ○氷魚ハ鮭白魚ハ鮎ハ大サ一寸ばかりなる白
魚物字治川にて多くとれる 文意 能米ハ不足ハ食料の米ハ也
ぬ也ハ買儲又ハ他ハ乞索めるをして参らせ
程ハふ足のものハ使者を以申越されしと

五月の日藏人將監
大江　左京の進殿

此間者連連の物忩
ふ依て互ふ密密の
雑談と忘る誠ふ不
慮の至也抑世上既
静謐ふ属する之間
鶏鷹逍遥の爲ふ参
入と企てんと欲し
候ふ之處

五月の日　藏人將監大江
左京の進殿

○大江ハ貞親ハ後ハ二月阿保親王の子左衛門督ふまもるく
ハ名ハ音人ハ江相公と称ス博学宏才の人なり

世間ふ倦連く物ふ生長く雑
談不可忘抑世上既静
謐ふ属逍遥の爲鶏鷹参入
企てんと欲し候ふ之處

○鶏ハ月の名ハ小ハ○鷹逍遥ハ鷹ハ遊ぶ事と称
ちて意と云ふ意と放ちて走と云ふ山ハ猟ハ
のまふけめぐり捜ぶと云ふ 文意 ひやどハ連くて物忘れ
ふ長く雑談と忘れ慮ふ世上ハ既静謐ふ属ハ

謀叛反逆之凶徒籌策と廻らし盗賊狼藉之惡黨と引卒し國國に蜂起せ令め山海の兩賊強竊二盗の徒黨所所に横行せ令め人之財産と奪ひ取り土民之住宅を追捕し旅人之衣裳と剝取之間

○謀叛人逆賊の輩り起るといふ義○山海の賊とは山海の賊徒を指て結人とゆすり強盗の徒を謂ふ○二盗とは二盗賊の徒を謂ふ○盗人とは盗賊の徒を謂ふ○衣裳とは衣服を謂ふ○間とは間隙を謂ふ○謀叛人とは謀叛人を謂ふ○逆人とは逆人を謂ふ○盗人とは盗賊の徒を謂ふ○強竊とは強盗を謂ふ○惡黨とは惡黨を謂ふ○籌策とは籌策を謂ふ○狼藉とは狼藉を謂ふ○惡黨とは惡黨を謂ふ○引卒とは引卒を謂ふ○蜂起とは蜂の如く起るを謂ふ○山海の賊とは山海の賊徒を謂ふ○強竊とは強盗を謂ふ○二盗とは二盗賊を謂ふ○所所とは所所を謂ふ○横行とは横行を謂ふ○人之財産とは人の財産を謂ふ○追捕とは追捕を謂ふ○土民之住宅とは土民の住宅を謂ふ○追捕し旅人之衣裳と剝取之間とは追捕して旅人の衣裳を剝取る間

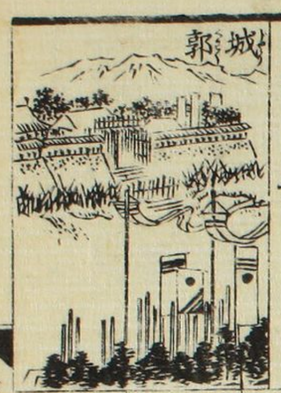
大ねと拾ひお尚法六位ふして城郭下しふ京るのろ毎ふ義人も
住ゝしゝう後世ハ御ゝび拾氏五状の中に泊するゝし○城郭ハ四
と城とひ外と郭ゝふく○強固ハ日ゝゝゝゝゝむゝ刑び○要害
ハち地のもろ〻ゝ千ゝ被ゝゝ乱とろ人味方のゝゝふハ要ゝろうて敵の
ゝゝふハ害とうるゝ義○云ゝハ城氏ゝゝゝゝゝ人と味ゝ 文意 城郭
と追法ゝん〻〻大勢軍ゝふ食ゝゝにより尚敵の一族の被戦場
に乱ゝ城郭と被都て構築る城法と 固之近日欲
追伐して苦不の地と強固ゝゝゝゝ

之ふ因て近日進發
せ令めんと欲ゝ候
ふ之處此間の戰場
ふ武具乘馬己下員
と盡ゝて失ひ候ひ
畢ぬ著弃ぬ鎧宿直
腹巻并ふ御乘替等

之近日欲
馬ゝ下ゝ人ゝ戦場武具
腹巻并ふ御乘替等

御助成候ハ者然る
可き也

今度の出立者當家
之眉目一門ゝ先途
也門葉之人人將骨
之合戦と致ゝ可き
之旨約諾せ令め候
ふ若存命仕て候ま
者再會之時申ゝ入
る可き也



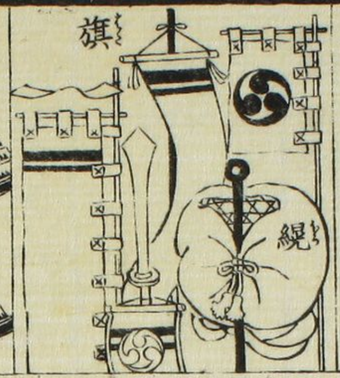
後者ハ合法ふあゝて扇と操ゝうて絡と云ゝる仰ゝ斧ゝ具
ゝゝ刑ゝ○助成ハ六月の之状ふ云の 文意 固之近日欲
人とすふ氏ゝどの合戦ふ物の具ゝるまでも失ひゝれゝ云ゝろゝの
後者ハ斧拔の強固ゝるゝと助成法ゝゝゝゝゝゝゝゝ

今度出立者當家之眉目一門先
途也門葉之人人將骨之合戦
之旨約諾せ令め候ふ若存命仕て候ま
者再會之時申ゝ入

城中ゝ軍勢

○眉目ハ面目ゝゝゝゝ○先途ハ中
学集ふ強義の云ゝと素物ふ仆要ゝ
とゝて○門葉ハ一つの摩ゝゝびゝると本の枝葉にゝゝゝゝ
ゝ度の出立ハ當家の眉目ゝて一つの先途ゝゝれゝゝ人ゝ將骨の合
戦と云ゝ法ひゝ方一命ゝて仆ゝゝ
ゝゝ再会の時仆ゝゝ人ゝゝ

中ん就く將軍家の御教書嚴密之上御縄御旗等を下し給ふ之際内戚外戚の一族一揆せ令ひる者也



御教書嚴密之上御縄御旗

源門戚外戚一族一揆者也

○按ずるに此月の條に御わんめ○縄とは都數十條ありて武家のが〳〵大低今の割六幅七尺七寸ふ徒とつけ色と貴ぶ中に紫骨ふの品なりを源氏の旗は白〳〵澤の模倣出來の時を無衣と紋て紋かゝせしゝ後に被けて戦ひ〳〵ゝ後に紅色の武者に色と用ひとゞ○

旗天正の御旗は縄〳〵て日月の紋と織ゐ出サ色文ニ尺ゝ〳〵ゝ三幅之徳家は綿と用ひ出寸大低長文八尺ゝて二幅之四郎の旗源氏は白色ゝて風常一文字紅平氏は赤色ゝて風常一文字白義氏は赤色ゝて風常一文字義氏は地色ゝふ但を都ゝの紋を付ゝ後世色ふ乳と紋〳〵て耳附旗と今俗ふ云幟色ゝ○内戚は父方外戚は母方一族ゝふ紋表とゝふ○一揆ゝ文ふは祝族一味すゝとゝふ

文意　総中の平家のはかり和文義〳〵ゝ〳〵ゝふ縄ゝ旗ゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝれは内戚

且ハ戦功之忠否ふ依り且ハ軍忠之浅深に隨ひ朝恩ふ浴せんと欲ゝ譜代相傳之分須一所懸命之地ふ於者相違有る可ゝらず不る者哉餘命を顧不るゝ依て心底と残さ不候ふ併御許容を仰ぐ恐恐謹言

所領の一族必死を究めて働ゝんことを擬るゝ

且依戦功之忠否を

軍忠之浅深に随ひ朝恩を浴せんと欲ゝ譜代相傳之分須一所懸命之地ふ於者相違有る可ゝらず不る者哉

餘命を顧不るゝ依て心底と残さ不候ふ併御許容を仰ぐ

○古ふ源氏ハ父方ふ平氏ハ母方一族ゝ

文意　他ハ合戦の手柄ふ於て所恐ふ浴ひ中と軍ひ

おりふ於ゝ代〳〵ゝ地ふ於ゝ代〳〵ゝ地ふ

六月七日　勅解由次官小町謹上
後藤兵部の丞殿

祇今使者と進せんと欲し候ふ憂遮而音信ふ預り候ふ條本懷ふ相叶ひ候ふ殊ふ以喜悦喜悦抑戦場御進發之事夜

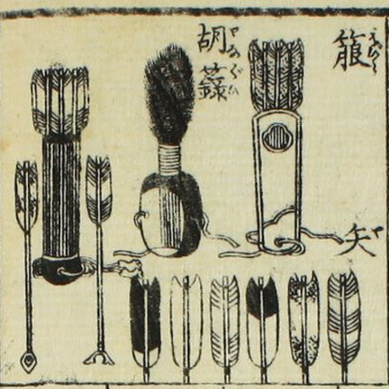
くふ孫ハ活ろ〻ん允倫命ん〻〻〻

反逆の輩ハ於ハ後昆の爲與同張本之族と貽さ不之と誅せ被れ強竊黨類ハ至て者同意顕員之

例を以て被也内法

○大将軍ハ天子の名代なり○副将軍ハ大将軍の次ぎ代官なり○侍大将ハ三月の番ぶ也○将軍家ハ御名方なり○代官ハ大将軍の名代なり○侍大将ハ三月の番ぶ也○将軍家の旗本

黒糸の鎧赤革黄糸の腹巻唐綾小櫻黒革縅大荒目の筒丸裙縄目紺糸綴腹當星白龍頭四方白の甲各一刎同色の袖并小手益臑當半首延懸鍍袴逆頬



黒糸鎧赤革黄糸腹巻唐綾小櫻大荒目丸裙縄目紺糸綴腹當白龍頭四方白甲各一刎同色袖并小手益臑當半首延懸鍍袴逆頬

○糸とハ紫の糸と云て縅しゝゝと云白海さわの糸〇扨糸縅ハ糸ゝ

こいゝ〇いづれも白糸ゝそ縅しゝゝとゝいふ〇赤革縅ハ赤き皮革ゝそ色ゝゝゝゝゝ又赤革色ゝゝゝいふ〇後世ハ唐綾ハ唐綾ゝそ色ゝゝゝゝ〇小櫻縅ハ少き櫻花の形を皮ゝゝ革ゝそ縅ゝゝゝ今ハ櫻ハ淡紅と行文ゝと縅ゝと云

此外枚数ハ多〇黒革縅ハ黒皮糸をもて縅ゝゝゝと云〇又荒目ハ荒丸と云ハ荒丸ハ羽の名ゝ荒丸と云ハ荒丸ハ羽の名ゝ荒丸と云ハ荒丸ハ羽の名ゝ

腰當を相具し弓者
木重藤漆籠糸裏等
也弦巻を加へ候ひ
畢ぬ

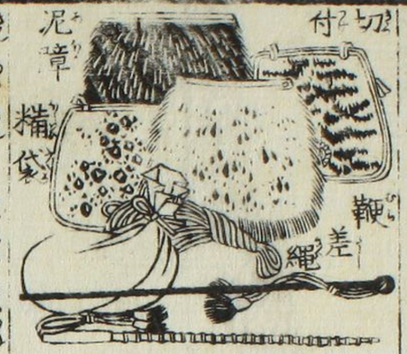
羽矯失各相具腰當弓者木重藤漆籠糸裏等也弦巻を加へ候ひ畢ぬ

漆箭糸裏也加弦巻也

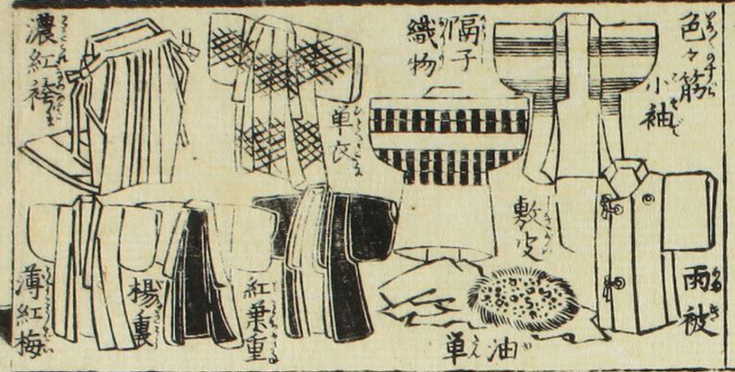
○箭ハ矢と賀つ〻

背に負ふ箭ハ竹箭ハ竹箭ハ竹

口を相副ひ



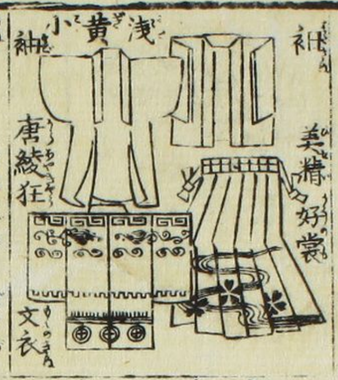
金輻輪の螺鞍白橋黑漆の張鞍料の鞍橋金地の鐙白磨の轡大形の鞦細筋の手綱腹帶豹の皮鬟の鞍覆虎の皮鹿の子の切付水豹熊の皮の泥障鞭差繩等御餞の爲之を送り奉る



舍人絹

○連枝革毛、虎毛、色毛、黑毛、斑、鹿毛、駁、栗毛、駁、鹿毛、駁、栗毛、駁、鹿毛、駁、栗毛、駁

兵粮八木鞍替の糒
袋行器野宿の料而
皮敷皮油單等の雑
具心の及ぶ所之と
奔走に

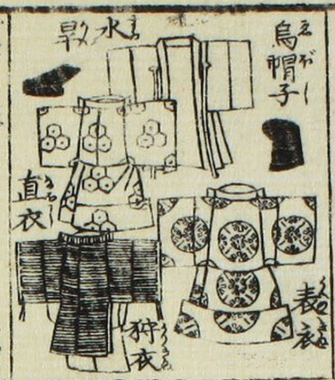


兵粮八木鞍替糒袋行器野宿
料而皮敷皮油單等雑具心及所
奔走之

○兵粮八木ハ軍用の米○鞍替糒袋ハ物ハ袋ハ物ハ袋ハ物ハ

ふ也諸事御帰宅之時と期〳〵候ふ恐恐謹言

六月十一日　兵部の丞丹治謹上勅解由の次官殿御報



恐れ乍申〳〵入道候ふ不慮之外傍輩の所營ふ驅加へら被候ふ之間微力之及ぶ所東西ふ奔走せ令ひるに依て寸暇と得不直ふ愚狀と捧げ候ふ自由之至に候ふ御意と得て内内洩〳〵申さ被可き也抑來る廿日頃勝負經營ふ候ふ風流の爲入る可き之物一ふ非

宅に時い忘れ侍ら

○乃ち〳〵具足〳〵八月ぐ〳〵に〳〵ふ〳〵ふと具足い〳〵ぐ〳〵○公卿ハ稽〳〵き〳〵

文意　程なのらぐうんやど（乃ち乃具足を乃ち乃ち乃ち

紅葉重ね楊裏薄紅梅色色の筋小袖隔子織物單衣濃紅の袴美精好の裳唐綾狂文の唐衣朽葉地紫の羅袖練貫浮文の綾摺繪書て目結巻染村紺掻淺黄小袖同く懸帶

の品數種ありとも

紅葉重ね楊裏薄紅梅色色の筋小袖隔子織物單衣濃紅の袴美精好の裳唐綾狂文の唐衣朽葉地紫の羅袖練貫浮文の綾摺繪書て目結巻染村紺掻淺黄小袖同く懸帶

○楊裏ハ表ハ黄色にして裏の色く黄なりとなり○薄紅梅ハ淺き紅の色をいふ○筋小袖ハ縦地の衣なり○隔子織物ハ碁の目ふ織なり○狂文ハ狂の字の浮文をいふ○唐衣ハ袖なしの浮文をいふ○唐衣ハ袖なしの浮文をいふ○朽葉ハ淡き紅なり○羅袖ハ表ハ紫にして裏ハ白く○練貫ハ表ハ白く○浮文ハ織文をいふ○摺繪ハ摺箔上の彩色なり○目結巻染ハ斑染なり○村紺掻ハ淡き紺なり○掻淺黄ハ淡き黄なり○

詩繪の手箱硯箱冠表の衣水干直衣狩衣烏帽子直垂大口大帷子太刀長刀腰刀箙胡籙大星の行騰房鞦牛の肩懸等上品ふ非びし雖注文に任せ相違無きを之樣申し下さ被可き也恐恐謹言

袖なしの浮文より樣〻十二巻のよふ巻るものく○打巻ハ經を巻緯ハ巻て縁といふ○袖ハ巻上なるべし○浮文ハ織文をいふ○摺繪ハ摺箔上の彩色なり○目結巻染ハ斑染なり○村紺掻ハ淡き紺なり○

巻ハ巻ハ巻ハ

文武天皇の御宇改元し年號遠孫の二ホ九ツ○表衣ハ
卯花ゝ鶯蘭繍孫の二枝ありたふ染ゝ地紋ゝの芝ゝ以ゝ
昇ゝ多ツ○五千八紋年紋おゝて制ゝ紋也亀の甲ゝゝて狩衣
紋あり○亀衣ハ深ゝ紋ゝ染色の法法地紋の蹴鞠ゝ以
て表ゝ少ゝ多ツ又ハ小ふ小亀ゝ表ゝいふゝ紋色ハ大抵袍衣のごゝ袖ふ
括ゝ用ふ○袍衣ハ紋色定ゝ飛布衣ふ紋ゝゝ云ゝ番ゝ袍ゝ
必ゝ用ゝ○烏帽子ハ人皇四十代天武天皇の御宇ふ始ゝ
制数ふ有ゝ皆紙ゝて紙ゝ漆ゝ以て塗る○亀裂ハ表紙ふ紋
て素紙ゝ絹ゝ絲紋を以て紋ゝ狩衣ゝ又布亀ハ大ゝ紋ゝ
る紋て倍ふ大紋ゝふ法大ゝ紋ゝ表ゝ○大口ハ唐七輪の文帯ゝ
り始ゝ表ゝ白ゝ紋ゝて紋ゝ今袖の袴ふ用ゝ紋ゝ○大帷子ハ官吏
の下ゝ表ゝ浮汗ゝ○擬刀ハ穏刀ゝ判刀ゝ等ゝ○袍衣ハ表ゝ六
月の五位ふ六ゝ○大ゝ紋ゝ袍ゝ紋ゝ上ゝ袍ゝ紋ゝ小袖ゝ表ゝ
雨ゝ用ゝ○烏帽子ハ人皇四十代天武天皇の御宇ふ始ゝ
白ゝ紋ゝ表ゝ表ゝ表ゝ紋ゝ表ゝ紋ゝ表ゝ紋

物の事目録ふ任せ之と下さ被る所也

用竭て後者急ぎ持参せ〻被可き也

但し単衣の文要用の分者差合ひ候ふ之間練色の魚龍白張裏衣二重候ふ注文之外使者に屬して之と申し入る〻被長絹素絹袈裟精好薄墨の衣法服錦の七條裳横尾鈍色下の袴

鐃鉢錫杖鈴佛具如意香爐水精半裝束の念珠帽子直綴鼻高草鞋

被下之也用竭後之急可令持参也

○掛座ハ坐ひ〻そ〻し〻て法ゐれとゐふ○反故ハ一度用ゐた〻る紙と○狂紙ハかろんじいやしむ〻べき物也○目録ハ目物の惡ぎれと

文意 料紙をひろ〻ひ〻くるゆゑ反故と用ゐ反古と法ひ故ゆゑ狂紙ハめ〻び扱や紙れ〻と目録の惡き物ゆゑ

但し単衣文要用分也

○練色ハ灰色の惡くとそ

文意 但し単衣の文要用分也

練色白張裏衣

○練色ハ灰色の惡くとそ

文意 但し単衣の文要用分也

練色白張裏衣

二重候注文之外使者に屬入之

長絹素絹袈裟精好薄墨衣法服錦七條裳横尾鈍色下袴

○要用ハ差支り

○練色ハ灰色の惡くとそ

文意 但し単衣の文要用分也

練色白張裏衣

○練色ハ灰色の惡くとそ

文意 但し単衣の文要用分也

練色白張裏衣

二重候注文之外使者に屬入之

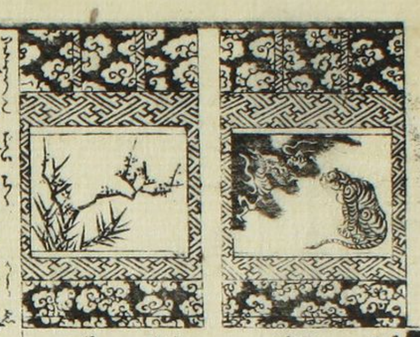
長絹素絹袈裟精好薄墨衣法服錦七條裳横尾鈍色下袴

○長絹ハ長き絹と○袈裟ハ僧の衣と○精好ハ綾ハ織ものゆゑ精好と○法服ハ僧衣と○裳ハ裙と○横尾ハ裳裾のゆゑ横尾と○法服の上にかゝる裳ハ下の衣と法家ゆゑ用ふ○横尾ハ裳裾のゆゑ横尾と○鈍色ハ灰色の惡くとそ

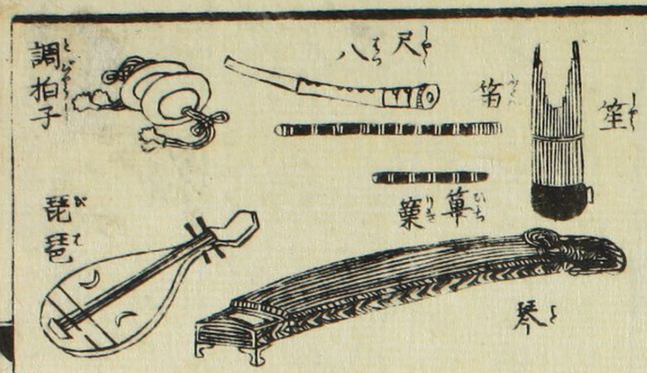
文意 但し単衣の紋様や絹さゝる糸ハ差ふべかる仁依て練色の色法ハ下と名りふ者ハさる程見緑の外使者ハ屬ゆゑ

水精半裝束念珠帽子直綴鼻高草鞋

○水精ハ水晶と○半裝束ハ僧の衣と○念珠ハ数珠と○帽子ハ頭巾と○直綴ハ僧の衣と○鼻高ハ高鼻と○草鞋ハ藁ぞうり



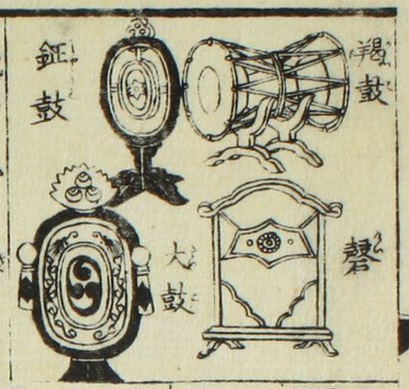
龍虎梅竹の唐繪一對并ふ横笛笙篳篥和琴箏琵琶方磬尺八太鼓羯鼓鉦鼓二の鼓銅鈸子摺鼓等同く之と尋ね下さ被用竭き事終ら者不日ふ持参せら被可し損失有ら者生涯之不覺也存知せら被可き者歟恐恐謹言



字よ似くう栖の色さ武天ぞう○栄義栄表孫の栄分の鶴ど
つうぎくう数孫と○帽子ハ僧の所ふ被るものを割一うふ武ぞ所
中の数と○垂髮ハ今の俗髮と蓄ハ海松被ふ被ると上下分うに被
せつ髮を垂髮と云く今俗ふ十徳とつふハ海松のゆうるふ又垂髮の
者と祝と十徳とつふハ俱れと○裏ハ俗俗のまく履と羅
ゆ表ふく○茅蜩ハ和ふ茅蜩者と今時しそわくどとつふ

龍虎梅竹唐絵一對并横笛笙篳篥和琴箏琵琶方磬尺八太鼓羯鼓鉦鼓二鼓銅鈸子摺鼓等同之用竭事終不日可被持参有損失生涯之不覺也存知謹言

○横笛ハ竹き一尺四寸九ツあり○笙ハ唐土女媧氏作り初し大さ十九簧ふ有り十三簧ふ有り
て稍く小く文武成く六作く日本武帝より始るとそ○篳篥ハ唐土
神農始て作ると今の十二絃琴く○琵琶ハ六角琴より出て魏
の武帝始て作ると○箜篌ハ頭ふ四ツの穴あり○方磬ハ
玉石ふて造る唐土覺の時作ると○尺八ハ大抽一尺八
寸ふて唐の出にあく中抽ハ八尺四寸小抽ハ二尺二寸孔ハ表四ツ裏一ツ唐の
玉宇帝好でこれと吹しとつふ○古鼓ハ文王ハ楽器の曲と拍と拍と
と鼓とつふ古さハ天竺作ふ有の説○羯鼓ハ天竺作ふ有の説
とそこれと撃つ今俗腰鼓とも赤羯鼓とつふ○鉦鼓ハ古の
説金鼓と今浄土宗ふ用る鉦鼓とハ同じ○二鼓ハ鼓と鉦と
いつるも鼓ハ古の楽器を形小き鼓を二つ連ハ帯ひて掛て鼓を
ものく今小児の玩具とふ古鼓とつふの如く形の如し○摺鼓
ハ小と形ふ出て摺鼓と云ふ○銅鈸子ハ銅数と合と云て表く作る心中に草鞋と
二枚撃合して音と云ふ○摺鼓ハ古の楽器と今ハ用ふ人皆是



七月の日紀

謹上　大藏の丞殿

下著以後久く案内を啓せ不る之條殆往日の芳恩を忘るが如し頗胸中の等閑ふ非ず只自然之懈怠也恐れ入と

候ふ抑洛陽靜謐田舍無異貴邊の本望也愚身の快樂察せら被可き也

之に就て御引付の沙汰定て行ハ被候ふ歟所領安堵遺跡爭論越境違亂之際參訴と致さんと欲する之處此間の疲勞所領の佗傑合期し難く候ふ貴方の御扶持を憑み代官を進じ可き也短慮

七月の日　紀

上　大藏の丞殿

○大藏の丞ハ為兼の子也　○紀氏ハ紀伊守為兼也

下著後久不啓案内之條殆如往日芳恩忘頗胸中等閑非只自然懈怠也恐入候抑洛陽靜謐田舍無異貴邊本望快樂可被察也

○洛陽ハ京都　○田舍ハ鄙　○芳恩ハ芳志　○懈怠ハ怠慢

文意　京都ハ平安ハ無事ニ成て田舍ハ鄙ニ成ても貴方ハ快樂ニ成ハ我ハ何ぞ不快樂ニ成ハ可被察也

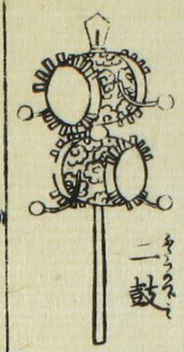
○抑洛陽ハ京都　○芳恩ハ芳志　○懈怠ハ怠慢

文意　京都ハ平安ハ無事ニ成て田舍ハ鄙ニ成ても貴方ハ快樂ニ成ハ我ハ何ぞ不快樂ニ成ハ可被察也

文意　京都ハ平安ハ無事ニ成て田舍ハ鄙ニ成ても貴方ハ快樂ニ成ハ我ハ何ぞ不快樂ニ成ハ可被察也

抑洛陽ハ

未練之仁聳古せ今むる之程御詞を加へら被不れ者越度出來らん歟草案の土代と書き與つら被奉行所ふ引導せら被者恐悦る候ふ



二鼓

枕

技打之流代変也雖為未練之仁聳古せ今むる之程御詞を加へら被不れ者越度出來らん歟草案の土代と書き與つら被奉行所ふ引導せら被者恐悦る候ふ

○引付の沿革は先代より定まれる例にて今ようやくふ合せて沿革する○安堵は端書に二月廿日の法の通りと安堵者を勅ぶる義と二月廿日の法の通りと合せ者〜○世既に年積り〜世れ〜既に流傳ふ〜〜人と事〜〜〜

〜〜〜

晩學ニ候ふと雖螢雪鑽仰之功捐つ可うら不古き日記法例引付を借し給へバ一見を加へ不審の事ニ於者尋ね明む可き也右筆等ハひ難く候ふと雖雖許之風情計者管見之窺を成し度く候ふ心事腐毫に能を不併面拜を期に恐恐謹言

○体定式ハ文体ハ定式の方法なり○而書ハ筆ハ行られと流れ〳〵動く○規式ハ規矩法式と例格なり○教学ハ教ハ上より下へ若教〳〵むとなり○教授ハ先生と活むる教なり○傍例ハ定式の外なる種〳〵なるの例なり○例法ハ八月の名なり○令体ハ掟令ハ城と○武家ハ武士なり○武家の掟令と武家の法例なり

文意 沙法不の一件法度の定例法なり

沒映学ハ定式ハ定式ハ功不可捐

備後右筆紀法例ニ付加ハ又ハ不

審事ハ迂ハ右筆等ハ

叶ハ新許之風情計者管見之

窺を成し度く候ふ心事腐毫に能を不併面拜を期に恐恐謹言。○晩学ハ学ハ学問なり○学問ハ学文する故なり○車馬ハ車馬なり○教授ハ教ハ教ハ教

八月三日　加賀大掾和氣
大掾和氣　民部の
大輔殿

八月三日　加賀大掾和氣
民部大輔殿

○民部大輔は正六位下に和氣清麻呂の子なり○加賀大掾は
延七位上和氣広世○和氣の姓は桓武天皇十六代の孫大和宿禰清麻呂の子なり

依て指事無きに依て常に申し通ぜ不

八月の輦御車

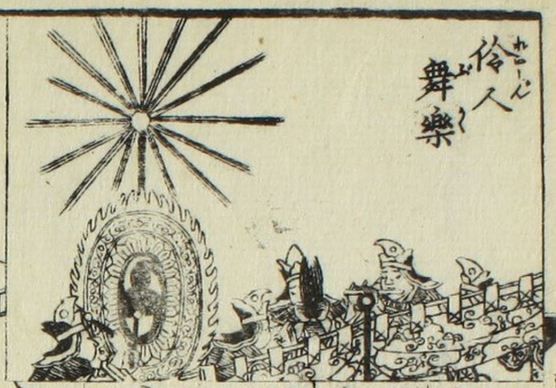
依て指事無きに依て常に申し通ぜ不
入候て慶芳問の儀
なれども海泰平一天静謐の事人
民の安堵満足致候の事如
斯に海泰平一天静謐の事人民の安
堵満足致候の事如斯
候へ共慶芳問の儀
略之至り驚き入
候ふ之慶芳問之
條珍重珍重日来の
本望忽以満足し候
ひ記ぬ庶幾何事
之ふ如んぞ四海泰
平一天静謐の事人
人の攘災所所の幸
祐也御沙汰の事厳
密ふ執行せら被る
所也更ふ停滞豫儀
之政道ま非ず訴訟
若悠悠緩怠之儀有
ら者御在洛之費也

○民部大輔は正六位下に和氣清麻呂の子なり○加賀大掾は
延七位上和氣広世○和氣の姓は桓武天皇十六代の孫大和宿禰清麻呂の子なり

依て指事無きに依て常に申し通ぜ不
入候て慶芳問の儀
なれども海泰平一天静謐の事人民の安
堵満足致候の事如
斯に海泰平一天静謐の事人民の安
堵満足致候の事如
斯候へ共慶芳問の儀
略之至り驚き入
候ふ之慶芳問之
條珍重珍重日来の
本望忽以満足し候
ひ記ぬ庶幾何事
之ふ如んぞ四海泰
平一天静謐の事人
人の攘災所所の幸
祐也御沙汰の事厳
密ふ執行せら被る
所也更ふ停滞豫儀
之政道ま非ず訴訟
若悠悠緩怠之儀有
ら者御在洛之費也

○芳問は先方より我を訪られしを云ふ○清泰
は安ふ泰ふ○清泰一天いられも天下を云ふ○攘災は災を
祓ふ事○攘災は災を祓ふ事○祐は安ふ安
ふ○御沙汰は執行と訳す○停滞は滞ふ○政道は
加賀大掾が紀氏の名を指すと云ふ○洛は京都の
の所在を云ふ○洛は京都の中古は平安城ふ五畿内の
あり大名高家の人々京都ふ来動せられ京に居ると云ふ

文意　指せる事無きに依て常に申し通ぜ不
略之至り驚き入
候ふ之慶芳問之
條珍重珍重日来の
本望忽以満足し候
ひ記ぬ庶幾何事
之ふ如んぞ四海泰
平一天静謐の事人
人の攘災所所の幸
祐也御沙汰の事厳
密ふ執行せら被る
所也更ふ停滞豫儀
之政道ま非ず訴訟
若悠悠緩怠之儀有
ら者御在洛之費也



伶人舞樂

祢宜
神主

活持之計略と用意せら被可し先舉狀

[illegible]

進舉狀於代官に公所出仕諸亭

之經迴圖師と申に

中原況流秘計口入頭人内

奏聞機嫌窺ひ

[illegible]

[illegible]

と代官於進せら被

者公所の出仕諸亭

の經迴圖師と申に

可き也奉行人の賄

賂衆中の屬託上衆

の秘計口入頭人内

奏聞機嫌と窺ひ

之と申に可し讓狀

の謀實越境の相論

未甲乙の次第と分

さ未譜代相傳之重

書等者引付方に於

御沙汰に逢て被可

辛書に於て分明に注進

活○活計と計略に意して[illegible]

舉狀に古法にそのの目安の下書と云○代官に[illegible]

いる大掛ケ[illegible]代と称して○[illegible]出仕[illegible]

[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

頭人上衆闔閤右筆奉行人等終日御評定の爲窮屈有りと雖更ふ御休息無く之を勘判せらる被問注所の賦ふ就て闔閤重ねて之を賦る執筆問狀の奉書と訴人於書與ふる之時兩度ふ及で無音

文意　時に於て核狀の汁略を用ゆるも〇訴ハおのれを核狀の汁略を用ゆるも〇訴ハ代くに代くに訴ふ代くに訴ハ代くに訴ハ代くに訴ハ

わを方と名乗らく指紙く者ハすでて使者を出ふ法新寿と物せるるのく爰ハ人と名ハ使ゆを名寿とつ刻寿のの〇仁月の色林ふ人也〇遠方爰ふ和を方ら上の給に者くとつ〇教状ハ四状と もうげやうに又ハ法失るどしるるとつ〇名を爰ハ名寿の使者

わを方と名乗りをするとつ〇者ニ問ニ答ニ所陳ハ和をを出ハ 所状と初問ニ答者と初答とつふ代のごく九ニ爰所人とわを方

と生に問答の云案と者ハ〇対爰ハ所人とわを方と名乗て問答ニ也云案の物忠によりて理非を爰 ひするとつふ〇嘘虚是非ハそのの陳貢とつハ非と是ハ陳方唯と 是ハ負方ニ〇云捻ふ出ニふの問答の時者人のを出と擬ふ〇

爰ニ旅殺ふふ者の色状ふえめ 文意 法殺の流中ハ政勢のてあ手ハ 勅て体ふとふ〇そのの裁判ともふ所状と持ふ出ハを駅

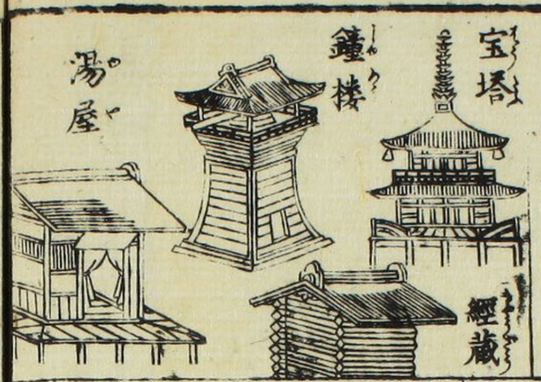
と役ふ〇ふ稲浜され魏筆の状と所人ふ〇ふ名ふ方一名ふ 云教ひて又所状と持ふ〇ふ紙と以て名ふふ支ふ

てもわを方ハ名乗と名れひふ〇ふ〇ふ〇ふ〇ふ〇ふ〇ふ〇ふ 所人の方ハ陳ふふの下和と体ふふ又わを方名ふ意と来ふふふ

問注所者永代の法 券安堵年記の放券 奴婢雑人の券契和 與状負累の證文等 の謀實之と糺明ハ 管領の寄人右筆奉 行人等の評判也奉 行人差符方之與奪 と得ハ當参の仁者 書下と成ー下國之 時者奉書と下ハ而 るふ無音之時ハ使 節召文と下ー訴陳 の状と調ハ當所の

問注所と永代法券安堵年
記放券奴婢雑人券契和與状負
累文書謀実糺明ハ管領寄人
右筆奉行人等評判也奉行人差
符方之與奪ハ當参の仁者書下
と成ー下國之時者奉書ハ下ハ而
ハ無音之時ハ使節召文と下ー訴陳
使者ハ調ハ當所陳状ハ書而執

執事年年の管領奉行人等に相對し問答を致し沙汰を披露す可し探題之異見ふ就て下知を加ふる所也



事書

被疑沙汰輒探題奉行人不可致問答事

○永代法令ハ田地屋敷ハ上下ともに奉行人の中ハ元の安堵ハ其の子孫ハ相續ハ奴婢ハ奴婢ハ主人ハ和與状ハ和睦の起請ハ沙汰文ハ負書ハ出ハ証文ハ○雜事ハ奉行人ハ執事ハ六月の五状ハ六月の五状ハ○裁判ハ奉行人ハ執事ハ○裁判方ハ奪ハ法令ハ○裁判ハ奪ハ○裁判ハ奪ハ○裁判ハ奪

所無くん者則之を召籠め或推問拷問拷訊等に及んで之を尋搜て與同黨類等を尋究め斷罪を可き者ハ之を誅せら被誡ひ可き者を之を禁獄し流刑す可き者ハ流帳に記さ被此外火印追放以下事の輕重其人の是非に隨て之を行ハ被可し

河依之雜類疑礼明犯罪の時。而犯已流罪の初に及び抵問拷問拷問拷訊に及び尋搜究め罪類可き者ハ之を誅せ不斷罪者の職者極獄之可流刑者被記帳。其以下追放以下隨事輕重其人是非に隨て

○雜類六月の条に犯罪を犯さんとする者○殺害人を殺害○山海の産法幕に盜六月の条に犯罪○放火火つけ○奴傷人奴婢を以て人を傷ハ奴婢を以て人を傷ハ○打擲打ちたたき人を打擲○強盜人を強盜○白刃ハ白刃○拷問ハ拷問

如來

座像菩薩

秘法數行

ひとあき合ふ○拷訊ハ宮月の条に拷訊ハ宮月の条に拷訊ハ○小金人下級ハ今のちかはんの下司○去る拷ハ去る拷と云ふ拷問と云ふ拷問の者ハ武士の下司の者ハ武士の下司の者ハ○拷問ハ拷問ハ拷問ハ

次ふ寺社の訴訟者本所の舉達ふ就て之を是非せゝ被越訴の覆勘者探題管領の與奪に依て之を執行せゝ被事を庭中於奏に家務の恩賞方法規式勝て計ふ可ゝゝ不る也其旨趣具ふ紙上に盡ゝ難ゝ御上洛之時心之及ぶ所粗申さ今む可く候ふ也恐恐謹言

犯せる法を撥ふ可ゝふいそぐれば奏ふけて面状さを出ず一味の者ならば裁ふめ死罪に相とるべきハ流人性ふ去況ふ氏ふ出ず氏ふ出ず殺害の形法を死せゝふの性をとを人の見推ゝ法ゝ可ゝ

次寺社訴訟者本所舉達就見兆之越訴覆勘探題管領與奪被執行ゝ奏庭中於奏家務恩賞方法規式勝計也旨趣具紙上盡ゝ時心及粗申令尽紙上洛之時心及粗申令申作也恐恐謹言

脇侍二天

八月七日民部の大輔田原謹上大掾殿

去比御札ふ預り候ふ之處他行之間則御返事を申さ不候ふ之條本意を失ひ畢ね抑將軍家若宮

○越訴ハ法外を越て上へ出ふ訴法するをいふ○覆勘ハ事ふの勘判を覆ふといふを覆ふ文字にいふ社方ふ訴ふ社方ふ訴ふ越訴ふ覆勘ふ

○探題ハ法外の探題の意也○庭中ハ御前の庭を也○恩賞ハ恩賞の沙汰をいふ○方法規式ハ法度撥の意也

文意　次ふ寺社訴訟ハ一件の訴訟ハ寺社本所の舉達ふ就て是非ゝ被越訴覆勘者探題管領の與奪ふ依て執行ゝ庭中奏家務恩賞方法規式勝計ふ可ゝ不る也

○越訴ハ法外を越て上へ出ふ訴法するをいふ○覆勘ハ事ふの勘判を覆ふといふを覆ふ文字にいふ社方ふ訴ふ越訴ふ覆勘ふ

○探題ハ法外の探題の意也○庭中ハ御前の庭を也○恩賞ハ恩賞の沙汰をいふ○方法規式ハ法度撥の意也

文意　次ふ寺社訴訟ハ一件の訴訟ハ寺社本所の舉達ふ就て是非ゝ被越訴覆勘者探題管領の與奪ふ依て執行ゝ庭中奏家務恩賞方法規式勝計ふ可ゝ不る也

八月七日　民部大輔田原

謹上　大掾殿

去比預り札推て奏ふ他行之間

御参詣之事供奉の日記或方ふ借用せら被候ふ後日態と進ぜ可き也其躰殆關東鶴が岡八幡宮の参詣ふ超過せ令め候ひ畢ぬ

佛菩薩繪像

不中出来ぬ事ふ候。実ハ云事作

将軍家参宮御供奉ふ後日態ハ其

記録備用或方ふ後日態ハ其

神殿ふ参詣ふ関東ふ於ハ長八幡宮ふ

詣ふ年

○扨亦ハ城州の石清水八幡宮と称ス○供奉日記ハ此度の為神ふ列ふの記録ふ○関東ハ六月の至状にハ四月ふ至ハ

○扨亦ハ御家ハ世利家と称ス室町の将軍ふ○

鎌倉ふ於ハ長八幡宮ふ参詣せ令ふ○特長八幡宮ハ情宮ハ御州鎌倉ふ於ハ牡蠣ハの動揺ふ

して鶴ふ神ふ清ふ

有ふ参詣ふ

扨年数経過ふ

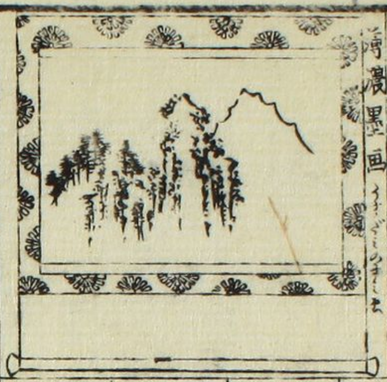
文意

其比ハ状況ふ

扨亦ハ情宮ハ御家ハ世利家と称ス室町の将軍ふ

扨亦ハ情宮ハ御州鎌倉ふ於ハ牡蠣ハの動揺

折り色と交ぜ



薄墨画

御經

○殿上人は白大位とりの袴の中えに滝口と東宮の侍はかりうちん羅いうけのこれ袴に紅の衣袴のうへに狩衣を着る○侍所程天術はかりの衣花に任事の人左右ふ陸奥守とゆくを稚の花笑うとゝ代ちらせしふ見えて云○狩衣は下衣袴の後に七月の狩ふ見る○法衣、祐の時若の白紙若者○布衣は無位殿帝うて低う下皮の袴○平勢蕾、袴橋と云○衣文撥高は花笑うして戦あるとゝふ○行狩は狩衣のようなれと○衣文は帯の〻の宣後○通色は皮位和高の宣色とゝふ○往文色黄元ふ北後半袴ようとゝ○稚金猫は手わかち身ふ佩ふ和の金色狩ふ花笑と若〻〻〻ふ成ふ○中間は下は衣も甲冑を若〻〻の〻花若と云○舎人は六月の色成ふ見る○半絹は法華とゝ寸る事つゝ○狩花交色は袴〻〻と笑花交色の袴と云

文意 法色は成ふりの結様上下位重ね人中る事の狩花若までもむとゝ色とゝ稚ぞ

陳武士警固の勇士色色の甲冑思思の鎧直垂馬鞍弓箭重代之重寶と著〻新調之美麗と用ひ門外自者前後の隨兵上下に番い左右の帯刀二行ふ列り御帯刀の役人御調度懸の人弓手妻手ふ相並人で之に扈從し

抖藪行人

中ん就く後陣の武

御迎の伶人者樂妓を調へ羅綾之袂を陣頭於翻し御前の舞人者鞨鼓を打て舞行之躅を庭上於時ゝ禰宜神主者幣帛を大牀於捧げ別當社僧者經の紐を玉の甍於解く巫ハ女者裙帶を曳て透廊ゟ舞遊ひ職掌の神樂男ハ調拍子を合して拜殿に祇候し

○ちゝとてゝとうけ妻の習ハ家にゝ〇ちゝ法妻子ハ右ゝ
○庭後ハ左ひゝ〇の義 文意 中ゝも後陣ハ行ゝ藝間の武士先拜ゝ
作来の義也と云ゝもゆゝ祇園の矢壺と作ゝもゆゝていづれも沙門城
出ゝゝゝ西東の舞後ハ右ゝ伺候ゝゝ義也ゝ 庭後ハ堂ゝゝ

伶人を調樂妓翻打鼓を打陣
巫ハ舞人を打鞨鼓時ゝ行ゝ
禰宜神主者幣帛を大牀
別當社僧者紐を解く巫ハ
女者裙帶を曳て解く巫ハ
透廊ゟ舞遊ひ職掌の神
樂男ハ調拍子を合して拜殿

加之臨時之陪從當坐の神樂朝倉返の詠物拍子の本末を調へ賽礼の奠如在之儀を致し神感之興嚴重之態誠ゝ以揭焉也耳目之及ぶ所悉筆に遑ら不只高察を仰ぐ而已謹言

うけりの後ハあや印作人の装束〇舞人ハ作人ゝ紐る義也
し〇鞨鼓ハ鞨の履也〇後ハ銀之袂ゝ也ハ巫〇ゝ
ハ神あの奈壺と云〇別當ハ社僧の云〇玉冠ハ結搔ゝ冠幕の毛
とゝ也〇巫ハ神と縁ゝ男と巫ゝゝひゝと觀ゝゝ〇八乙女ハ神
ゝ神子義也〇裙ハ子也常ハ引〇職掌ハ素拍ゝ義ゝの裝
束と云る安ゝとゝ〇神樂男ハ職子方〇調拍ゝハ七月の返拍ゝ
ゝの〇拍作ハ手和ゝ也〇時宜と作ゝ 文意 五作の作人ハ舞ゝと
作ゝ〇神樂ハ神職の業ハ帯帛と持ゝ社僧の法ハ後經ゝゝの神子ハ
神ゝと參ゝ

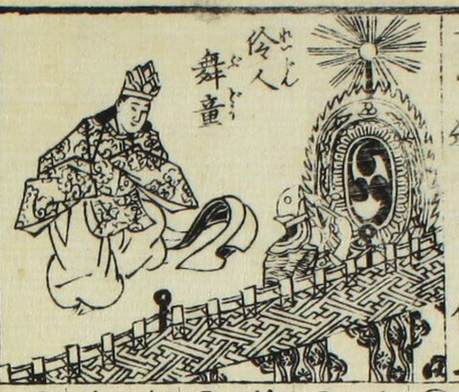
加之臨時陪從當坐神樂朝倉
返詠物拍子本賽礼奠如在
之儀致神感之興嚴重之態誠ゝ以揭
焉也耳目之及ぶ所悉筆遑ら不只
高察仰ぐ而已謹言

八月十三日散位長谷部謹上大内記殿

文意

○ 当時、陰陽師、亀ト、ヨリ、外ニ、他ニ、抑ノ、近日、執行、仏事、大法会、事、作、法、寺、長老、宮中、当日、唱、導、師、役、百員、行、者、雑、叫、請、客、頭、首、僧、侍、者、輿、丁、ハ、○、法、法、流、流、ハ、ナ、リ、ト、ハ、ナ、リ、ト、ハ、ナ、リ、ト

具せら被光臨を許
し候ハ者カ者駕輿
丁を進す可く候ふ



○右上ハ下より上へ読む○冥衆冥ハ幽暗く神仏
の衆ハあらゆる人の知らぬ所の義○授戒ハ授戒
○大法会ハ仏事と修して流傳集会すると云○行法ハ教て拍子すること
○古老ハ古の経験者をいふ多数老く学識に長じたるの天稟
○唱導師ハ法会の首座にして経文を唱へ説法を導く僧をいふ
○行基ハ泉州の一僧の名にして和尚の傍に付添て勤と承る僧をいふ
行基と云人あり各十月の之法を死に○独叫ハ和尚の小用を勤る小者
○法会ハ客人をあつらへ僧を請ハ○ハ貴ハすべて
ぐちくり僧といハ○力者ハ乗物を担ぐ人○駕輿丁ハ輿舁
なり

文意

供養有る可き條
條者精舎一宇三重
の塔婆金堂寶塔經
藏鐘樓食堂休所總

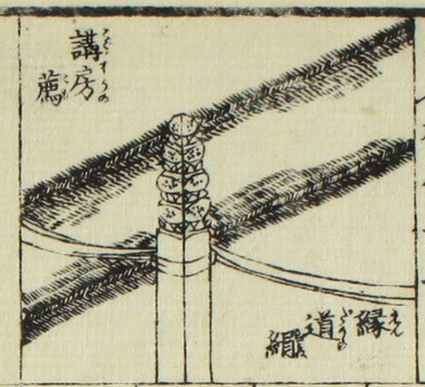
可有供養條者精舎一宇三重塔婆金堂寶塔經藏鐘樓食堂休所總

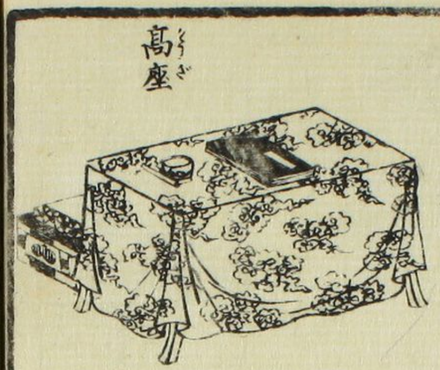
門二階湯屋僧坊金
色等身の如來白檀
坐像の菩薩脇士ろ
二天之を刻彫に細
金彩色の繪像各一
幅薄濃の墨画一對
書寫摺寫の法經般
若を轉讀一經王を
讀誦一祕法を勤行
一陀羅尼を唱滿一
真言を念誦に稱名
念佛九旬供花一夏
持齋禪律抖擻の行
人等攝待千僧供養

書寫摺寫般若轉讀經王讀誦祕法勤行陀羅尼唱滿真言念誦稱名念佛九旬供花一夏持齋禪律抖擻行人攝待千僧供養

二階湯屋僧坊金色等身如來白檀坐像菩薩脇士二天刻彫之
細金彩色繪像各一幅薄濃墨画一對
讀誦經王勤行祕法唱滿陀羅尼
真言稱名念佛九旬供花一
夏抖擻行人攝待

非人施行等也

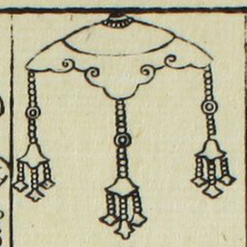




僧侶者非人施行也

○僧侶ハ袖ガ空く施行といふ事ガ袖ハ施行といふ事ガ袖ハ施行等也○食堂ハ食事ス場所ニ二階ノ二階ハ僧房ノ食ノ子ス所○休所ハ勤行休息ノ所○廊ハ二階ハ僧房ノ大ツク○湯屋ハ浴室ニ僧ハ下ノ浴室○食堂ハ食事ス場所○僧房ハ下ノ僧房

非ぶと雖啓白許と以一磬と鳴らさ被可く候ふ也一向ふ御哀憐と仰ぐ恐惶敬白



瓔珞

造花

九月十三日　沙弥

進上　侍者御中

當白法の行る一磬也一向仰き

哀憐恐惶敬白

○仏布施ハ仏ゆに布く施物〉○被物ハ縁布の者孫物と合

法華の勢ふ偈流〉の〉物〉○經様いろくさり仏義○優婆ハ

法華の威と云○當白ハ始〉經の教端とい〉○芸ハ浸絶の始〉

終とふ和ら〉〉物〉○教白いとやまろてまをさと申ス

物ホの和ものて」も仰ふまゆびでうりのゆうり只我恵を助ること

撮〉て拠りハせのうれ〉法華優婆のゆまでハわ〉びしも絶文乃

ばでうりと始めてゆ恵とうちうれ一向ゆ仏表情のわどて仰ふとうり

文意　布施

九月十三日

進上　侍者御中

沙弥

○侍者の法ハ芸の〉ゆの文中にえめ

○沙弥ハ十月の〉ゆ中にあるん

芳札之旨披見せ令め候ひ訖ぬ誠ふ御給仕有る可き之旨誓願せ〉被る歟今于懈怠之條凡情常の業障也尤謝せ〉被可き者也唱導の事申〉入る候ふ之憂其期ふ臨で手輿御迎と給ふ可き由仰ふ候ふ

善根の事兼日諷誦願文と進せ〉被可〉佛像經卷讃嘆者

芳札之旨披見せ令

仕し給被訖誠ふ御

凡情業障尤謝申入

事申入候ふ之憂

迎と給ふ可き由

○給仕ハ仏ふ仕ふてつうふと云○凡情ハ凡夫

の情〉○業障ハまごそ者の業障ふ〉〉世

の陰得ふうづうふとゆふ○唱導ハ法の〉を説ふ仏ふる唱導師のゆ〉〉○

されんと誓ひ申ふ〉〉の〉ゆ説ハ法仏と云ふ

文意　仏ふの誠被りん〉ゆ仏誠ハ法仏と云ふ

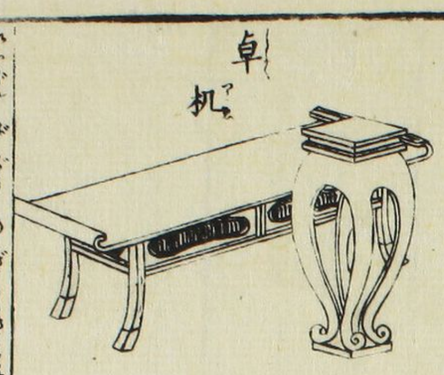
善根の事兼日諷誦

願文と進せ〉被可

〉佛像經卷讃嘆者

子細有る可ら不
堂塔供養并ひ法華
八講者大法會の儀
式ひ相當る歟法服
登高座大行道等有
る可し聖道の名僧
を以其節を遂げら
被可し講師讀師注
記竪者證義探題并
ひ唄散花梵音錫杖
對揚呪願師等之と
加請せら被可き也

進涌塔文佛像經卷擬供養ふ
有る可堂塔供養并法華八講
大法會儀式相當る歟
登高座大行道等有る可
聖道の名僧
其節を遂げら
被可し講師讀師注記
竪者證義探題并
唄散花梵音錫杖
對揚呪願師
加請せら被可き也



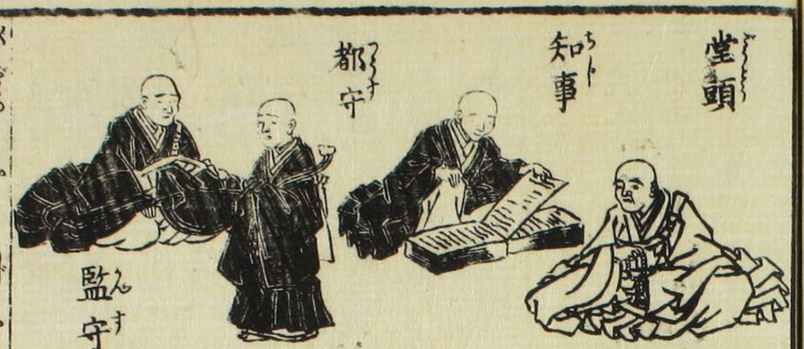
伶人舞童之儀式殊ひ大切也法會の指南之と先と爲用意

講師讀師者ハ法会の経文を讀ミ注記ス○竪者ハ竪義者ハ竪義者ハ探題ハ講師ハ讀師ハ法会の経文を判釋する僧○注記ハ竪義問者の論義を書く役○探題ハ竪義者ハ竪義者ハ探題ハ竪義の論義を書く役○唄ハ唄師ハ言わひ梵唄とつくしまて生ぶを唄ハ唄と讀する役○散花ハ散花ハ梵唄ハ唄師ハ唄と云役○梵音ハ梵音ハ梵唄ハ唄師ハ言わひ梵唄とつくしまて生ぶを唄ハ唄と讀する役○錫杖ハ錫杖ハ錫杖ハ錫杖を振て文と唱ひ上る役と云箇の法用と云法會の始○呪願師ハ願師ハ願ハ願師ハ願師ハ願師

せ〻被可き物者縁道の絹講房の薦縵幕大宝高座繒蓋瓔珞如意香爐沓合白蓋赤蓋白拂法螺焼香造花卓机臨時之纒頭者左道之儀也周章無き之様兼日調〻置き被可き也心事多〻と雖紙面限有り只御意を得て認め〻被可き歟委細見参之時を期し候ふ恐恐謹言

也法会指南の為先て被用宗物の縁道俗講房薦繒幕大宝高座繒蓋瓔珞如意香爐沓合白蓋赤蓋白拂法螺焼香造花卓机臨時纒頭左道儀也周章無き之様兼日調〻置き被可き也心事多〻と雖紙面有限只御意を得て認め〻被可き歟委細見参之時を期し候ふ恐恐謹言

八月十三日



九月の日 侍者
平の入道殿

の法ふ天〇錫杖ハ杖子の錫と云ふ事〇拂子ハ拂子の毛を用ひる〇拂子ハ六月の無礼也〇繒ハ古抄に仏菩薩の上に布と云ふ〇繒幕ハ六月の毛氏也〇大宝ハ仏用ふる漆塗の宝塔〇高座ハ法使の座〇繒蓋ハ仏の蓋〇瓔珞ハ珠玉を糸に貫て云ふ物〇如意ハ七月の道具〇白拂ハ白牛の尾を以て作る〇法螺ハ貝を吹ハ一切法伝達の〜めとなり〇左ハ三月の毛氏也〇左ハ二月の毛氏也〇左ハ二月の毛氏也〇錫杖ハ杖子の錫と云ふ〇

文意 講説の儀式ハ仏の如く天竺の法也〇法会の指南なれと雖紙面の限あるに依て委細ハ左右の〜の口〜を用ひざる事〜〜〜

平入道殿

○平入道殿ハ三月の末に出家し給ふ○入道殿髮を剃りこゝる者をいふ仏門に入るの意

入院新命退院雲堂久相看申さ不之間近日召請申し可く候ふ次且ハ看經の爲且ハ諷經の爲大齋を行ハ令む可く候ふ同く者結夏以前然る可き之時分ふ候ふ

○入院新命ハ一寺の住持を云ふ退院雲堂ハ前住の人を云ふ相看ハ互に参禪の人を云ふ○近日ハ近頃を云ふ○請中ハ招き申すこと○諷經ハ誦經を云ふ○結夏ハ四月十五日より七月十五日迄を云ふ○大齋ハ大法の事を云ふ○結夏ハ四月十五日より七月十五日迄を云ふ

文意 平入道殿ハ三月の末に出家し給ふ

禪律の僧衆諸寺諸社の聖道の衆徒之を召請する事に候ふ但し時の點心の作法贈物布施の次第故實無く候ふ調菜之仁古老の行者等の中器用之仁定りて存知せ令むる歟委細示し給ふ可き也

令と云ふ○禪律ハ禪宗と律宗を云ふ○聖道ハ大乘を云ふ○衆徒ハ僧を云ふ○召請ハ招き請ふこと○點心ハ小食を云ふ○贈物ハ贈り物を云ふ○布施ハ僧に物を與へる事を云ふ○次第ハ順序を云ふ○實ハ實に○調菜ハ料理を云ふ○仁ハ人を云ふ○古老ハ年を經たる人を云ふ○行者ハ修行者を云ふ○器用ハ才能を云ふ○存知ハ知ることを云ふ○委細ハ詳しく○示し給ふハ教へ給ふを云ふ

徒然草作僧時張り仏法修行の事

○徒然草ハ作僧時ハ僧になる時を云ふ○張り仏法ハ仏法を張り行ふを云ふ○時分ハ時節を云ふ

布施法華經を以て本とす

○法華經ハ妙法蓮華經を云ふ

老行者中器用之仁定りて存知せ令む

○行者ハ修行者を云ふ○器用ハ才能を云ふ○存知ハ知ることを云ふ

委細示し給ふ可き也

○委細ハ詳しく○示し給ふハ教へ給ふを云ふ○可き也ハ可きを云ふ

禪家者堂頭和尚東堂西堂并小知事方小ハ都守監守副守浴主典座直歳都管都聞修造主堂主淨頭頭首方小者前堂後堂の兩首座書記藏主維那知客燒香の侍者書狀請客湯藥衣鉢等の侍者

此外者奮之諸僧塔頭の坊主且過之僧

山主庵主沙彌喝食行者參頭副參望參供頭堂司庫司炭頭調菜人工者兄部出納山守木守門守火鈴板等也

旦過僧山主庵主沙彌喝食

參頭副參望參供頭堂司庫司

炭頭調菜人工者兄部出納山

守門守火鈴板等也

○番茶ハ法僧ハ先僧達ハ番茶ハ六十菜ヲ云ハ○

塔頭坊主ハ寺ハ寺家ノ寺ハ○山主庵主ハ山一庵ノ主○沙彌ハ十戒ヲ受ケ初テ剃髮ス

後ノ稱ヲ僧侶出世ノ發端ス○喝食ハ初ハ寺ニ上ケテ學文ス

ヲ食ノ時僧元初ヲ也ノ牧ヲ折ツ役ヲ給仕ス味ツ役ヲ食ト

ヲ云ブ役ヲ也ヲ云ヲ法ヲ本ヲ

系ハ出家ノ法ノ者ノ數ヲ

入門宿ノ僧ヲ云ヲ○供ハ廚ノ調菜ヲ云ヲ○中間ハ雜門ヲ

ヲ云ヲ役ヲ也○庫司ハ物ノ出納ヲ

律僧者長老知事典座沙彌八齋戒乃人工法師等也

聖道者一寺の檢校執行別當長吏學頭座主院主執當先達阿闍梨法橋律師法眼僧都法印僧正山の目代小別當得業內供奉已講堂達預

○僧侶ハ門ノ內ノ成ル者ハ凡ノ內ノ在ル人ノ出入ヲ役ヲ

ハ火燈ノ中ヲ司ル○僧侶ハ人ヲ上ヲ

ヲ云ヲ役ヲ也○見終人ヲ云ヲ○出納ハ納戸ヲ

ヲ云ヲ老○門ヲ門ヲ司ル人ノ出入ヲ役ヲ

役ヲ○火ノ番ハ番ヲ云ヲ

老ノ中典座沙彌八齋戒人工法師

木也○律宗ハ門ノ內ノ成ル者ハ凡ノ內ノ在ル人ノ出入ヲ役ヲ

ノ二ヲ云ヲ○八齋戒ハ殺生偷盜邪淫妄語飲酒ノ八戒ヲ齊行寢

ヲ戒ヲ也ヲ云ヲ○法師ハ佛法ヲ達ス

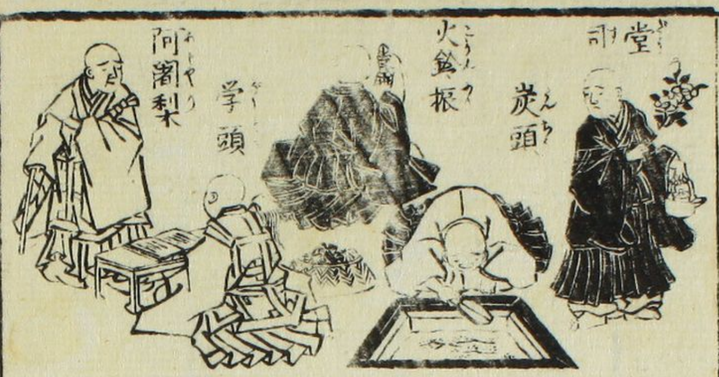
校執行別當長吏學頭座主

執當先達阿闍梨法橋律師法眼

僧都法印僧正山目代小別當得業

雪道云ヲ檢

専當勾當都維那寺主上座以下承仕宮司等



專當勾當都維那寺主上座以下承仕宮司

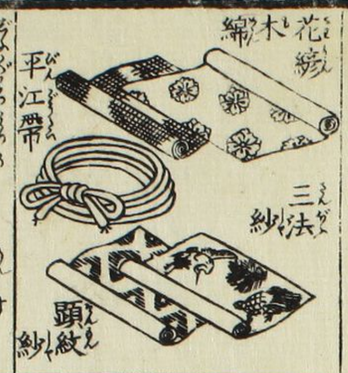
○專當ハ一寺の綱紀○勾當ハ一寺の事務○都維那ハ一寺の法務○寺主ハ一寺の綱紀○上座ハ学文の長○承仕ハ一寺の使僧○宮司ハ一山の寺の使僧○堂司ハ堂の使僧○炭頭ハ炭の係○火鉢板ハ火鉢の係○学頭ハ学問の係○阿闍梨ハ師匠の係○阿闍梨ハ師匠の統名○弟子の初心を教ゆる者を云ふ又執心記ともも云○法橋ハ上人の位○律師ハ律師の位○法眼ハ僧都の位○僧都ハ法印の位の次上人ハ法眼○法印ハ大僧都○僧正ハ僧正○僧正ハ東塞ハ准ず○山門ハ代々勅ハ一山の僧勢ハ勅を奉ずるなり○大勅ハ、當都東大寺にあり日本王中と勅化する也物許ハ別當ハ別當の名決○○の業ハ僧綱の業の稱○又業

其外有職僧綱僧侶等猶以禪家方者相伴邏齋之僧倍堂外僧堂の輩聖道者從僧驅使同朋推參之道俗臨時之客人人數ハ任せ點心と云ひ布施物と云ひ膳次と紀〻上下乃

業とも稱ふなり○門徒ハ門裏の門徒ハ門徒ハ門徒ハ

品を注ー給ふ可き也

諸事御才覺之外憑む所無ー心底を貽さ不之と示さ被者尤以本望也兼て又先日申ー入る所之掛塔の僧の事相違無く御許容ハ預て候者畏れ入て候ふ毎事參入之次を期に恐恐謹言



十月三日　監守

進上　衣鉢の侍者

禪師　御寮

御札之旨大齋之體心事申ー盡ー難く

度詞角

上ー之ー事

○僧職ハ之傳門代寺所國梨と稱ふ○僧綱ハ僧正僧都律師法印法橋と稱ふる人々○遁世ハ僧俗半ハ僧半ハつ世を捨ふ僧々○俗使ハ使ひ新むる小者々○日用ハ使ひ作りて用ゆ者々○拙素ハ僧俗ハ拙りけ小素りて法義の淺深する者をいふ○羅漢ハ出家する者髮をそり戒を受ー一夏九旬の間安居禁足ーと修行すると雖とも其修行のつり等ハ僧俗と定むるに云ふ

[文意]上ー件々の荒僧ーもの和ハ紀ハ陸でるものの者人數ハ無ー仕ー

[illegible]

諸事才覺之外憑む所無ー心底を貽さ不之と示さ被者尤以本望也兼て又先日申ー入る所之掛塔僧事相違無く

市祥寄ハ畏入維無の幼年入

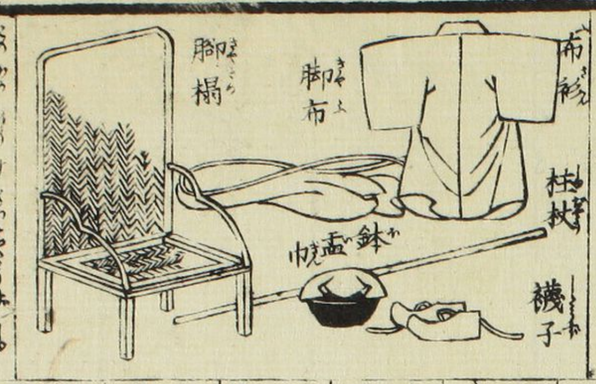
度恐々謹言

[文意]法の[illegible]祥の寄覺と稱て[illegible]ハ[illegible]ー一夏[illegible]ー[illegible]ー[illegible]ー

候ふ抑調菜人等の事然る可き仁無く候ふ之際粗愚才ふ任せ注進せ令め候ふ御布施物の事被物禄物等之と略せら被可き歟

方丈西堂者綾紫の小袖一重宛素羅青番羅三法紗顯紋紗花番羅并ふ黄草布一二端上品細美等知事方者素紗梅花并ふ襖單衫之絹花

綾木綿等各一配頭首方者素紗の衣袈裟平江帯各一帖



此外帽子皆襪子杜杖脚榻手巾布衫鉢

抑調菜人等の事然る可き仁無く候ふ之際粗愚才ふ任せ注進せ令め候ふ御布施物の事被物禄物等之と略せら被可き歟

文意 扨の旨大欲の企ようろこぶ〜く甘心のほど

九月の末ふ之ふ

方丈西堂者綾紫の小袖一重宛素羅青番羅三法紗顯紋紗花番羅并ふ黄草布一二端上品細美等知事方者素紗梅花并ふ襖單衫之絹花

九月の末ふ之ふ

文意 扨の旨大欲の企ようろこぶ〜く甘心のほど

方丈西堂者綾紫の小袖一重宛素羅青番羅三法紗顯紋紗花番羅并ふ黄草布一二端上品細美等知事方者素紗梅花并ふ襖單衫之絹花

綾木綿等各一配頭首方者素紗の衣袈裟平江帯各一帖。○方丈ハ禹城紙摩居士の石室方丈わ〜〜〜

盂巾 腦布 筋匙 刷木綿の肚脱 蒲團 花瓶 香爐 香合 香匙 火筋 蠟燭 竹篦 曲糸 法被 打敷 水引等頭首以下ふ加へら被可きの布施也

襪子 杖 拂 搨子 布 布施 拭布 筋匙 刷木綿 肚脱 蒲團 花瓶 香爐 香合 香匙 火筋 蠟燭 竹篦 曲糸 法被 打敷 水引等頭首以下ふ加へら被可きの布施也

○帽子ハ七月の五日ふかゝめ○襪子ハ當下にはくべき五衣と○杖ハつゑ○拂搨ハ煤はらけ○手巾ハてぬぐひ○布施ハ僧に與ふる衣と○布施ハ僧に與ふる衣と○筋匙刷ハ生絹ゝ○肚紙ハ衣袋の紙古法華ふ書く白布と○筋匙刷ハ筆八の毛を用ゆ○蒲團ハ圓形の坐具なり○香爐ハ香すゝひ焚押也○火筋ハ火ばし○竹篦ハ竹にて作る○曲糸ハ糸にて結ぶ○法被ハ仏ものの羊帷子

點心者水纖溫糟糟 鷄鼈羹羊羹豬羹驢腸羹笋羊羹砂糖羊羹饂飩饅頭索麪碁子麺卷餅溫餅

法被

菓子者柚柑柑子橘熟瓜澤茄子等時の景物ふ隨ふ可き也 伏兎曲煎餅燒餅粢

点心者水纖溫糟糟 鷄鼈羹羊羹豬羹驢腸羹笋羊羹砂糖羊羹饂飩饅頭索麪碁子麺卷餅溫餅

文意 さて仏事の系ハ仏壇の荘厳と仏ものの上ふ掛るものと系ハ仏壇の荘厳と仏ものの机の上ふ置て食せしむる布帷子の系ハ幕に似て

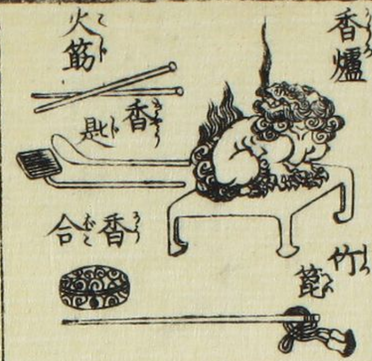
○水纖ハ水にて作る○羊羹ハ羊の肉にて作る○豬羹ハ豚の肉にて作る○驢腸羹ハ驢の腸にて作る○笋羊羹ハ笋にて作る○砂糖羊羹ハ砂糖にて作る○饂飩饅頭ハ麦粉にて作る○索麪ハ索麪にて作る○碁子麺ハ碁子麺にて作る○麺卷餅溫餅ハ麺にて作る○點心者水纖溫糟糟ハ點心の水纖溫糟糟にて作る○鷄鼈羹ハ鷄と鼈にて作る○羊羹ハ羊にて作る○豬羹ハ豚にて作る○驢腸羹ハ驢の腸にて作る○笋羊羹ハ笋にて作る○砂糖羊羹ハ砂糖にて作る○饂飩饅頭ハ麦粉にて作る○索麪ハ索麪にて作る○碁子麺ハ碁子麺にて作る○麺卷餅溫餅ハ麺にて作る○點心者水纖溫糟糟ハ點心の水纖溫糟糟にて作る○鷄鼈羹ハ鷄と鼈にて作る○羊羹ハ羊にて作る○豬羹ハ豚にて作る○驢腸羹ハ驢の腸にて作る○笋羊羹ハ笋にて作る○砂糖羊羹ハ砂糖にて作る○饂飩饅頭ハ麦粉にて作る○索麪ハ索麪にて作る○碁子麺ハ碁子麺にて作る○麺卷餅溫餅ハ麺にて作る○點心者水纖溫糟糟ハ點心の水纖溫糟糟にて作る○鷄鼈羹ハ鷄と鼈にて作る○羊羹ハ羊にて作る○豬羹ハ豚にて作る○驢腸羹ハ驢の腸にて作る○笋羊羹ハ笋にて作る○砂糖羊羹ハ砂糖にて作る○饂飩饅頭ハ麦粉にて作る○索麪ハ索麪にて作る○碁子麺ハ碁子麺にて作る○麺卷餅溫餅ハ麺にて作る

柚柑柑子橘熟瓜澤茄子等時の景物ふ隨ふ可き也 伏兎曲煎餅燒餅粢

菓子者柚柑柑子橘熟瓜澤茄子等時の景物ふ隨ふ可き也 伏兎曲煎餅燒餅粢

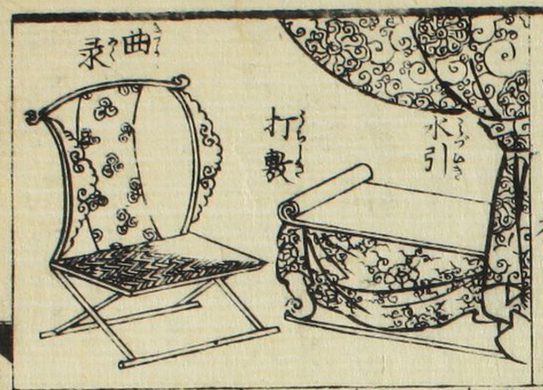
菓子者柚柑柑子橘熟瓜澤茄子等時の景物ふ隨ふ可き也 伏兎曲煎餅燒餅粢

興米索餅糒粽等も客料の爲用意せら被可し



御齋粥以前ゟ調ゝ置う被可き茶具者建盞天目胡盞饒州の茶碗并ゟ木椀茶器八入の盆一對茶

瓢茶箋茶挿茶巾茶杓兎足湯瓶鑵子播茶磨等并ゟ椀折敷豆子揲子追膳三の膳れ折敷同く副へ整へら被可き也



京物也伏見曲物焼物漆器無米索餅糒粽ゟ料ノ被用之

○山一度も雖なの内こそ人ゝ本ゝ搗椀佑ゟサンスこゝゟ樹皆も実ゟ柚ゟ似て大く香ハ乳柑ゟ

く味ハ枇のごゝ○椹子ハ柱れの異名○柚柑ゟ皮ゟ長ゝう○熟瓜ハ糊瓜○沃茄子考○伏兎ハ西字偏佑ゟ

葛の佑ゟ○曲ハ本字横佑ゟ○楊ハ柳類多くして葉椹精米と雖て搗ゝるの佑ゟ○奥茶ハ本字粗粉と也ゟて

○宗鱗ハ佑ゟ宗鱗ゟ紅ゟ○糒ハ佑ゟ糒ゟ

八時素物ゟ也ゟ物何ゟのゟ料ゟ用て也ゟ

丈意 果ゟの類

汁物粥飯茶具建盞天目胡盞饒州茶碗茶椀茶器八

入盆一對茶瓶茶匙茶桶茶巾茶杓兎足湯瓶鑵子播茶磨茶

小茶椀折敷豆子揲子追膳三

打敷同の社用也

○建盞ハ同物ゟ唐土建州より出る茶碗也

目ハ茶碗の新○胡盞ハ胡類ゟ茶碗也○饒州ハ唐土の地名○本

椀ハ椀物の盞也○茶具ハ茶碗也○饒州ハ唐土の地名○本

ゟ○八入ハ入ゟ也○茶瓶ハ湯瓶也○茶匙ハ匙也○茶桶ハ

茶ゟ桶ゟ也○茶巾ハ茶巾也○茶杓ハ茶杓也○茶磨ハ茶磨也

ハ茶の丸と入ゟ也桶也○茶中ハ茶巾也○茶物ハ茶也とも

也也○兎足ハ湯ゟの盞也○湯瓶ハ湯ゟ也○鑵子ハ茶ゟ也○

播茶ハ茶入也○打敷ハ敷物也ゟ也○追膳ハ膳ゟ也○豆子ハ

漆器盞盞の中ゟ也ゟ也○揲子ハ平盞の新也ゟ也ゟ也ゟ也

御齋の汁者豆腐羹
辛辣羹雪林菜并小
薯蕷腐笋蘿蔔山葵
の寒汁等也

菜者纖蘿蔔煮染乃
牛房昆布搗布烏頭
布荒布黒煮の蕗蕨
薤蕪酢漬の茗荷薦
の子乃蒸物茄物ハ
茄子の酢菜胡瓜乃
甘漬納豆煎豆茶苣
園豆芹薺羞酢の和
布青苔神馬藻の曳
干甘苔鹽苔酒煎乃

文意 仕様あらふ用をすくき素濁の菜物
延宿八二の宿とゝふ
八ちゝあふ中宿二ゝの宿の料とも心懸つく〻世せてたゝう

汁豆腐羹辛辣羹雪林菜羹

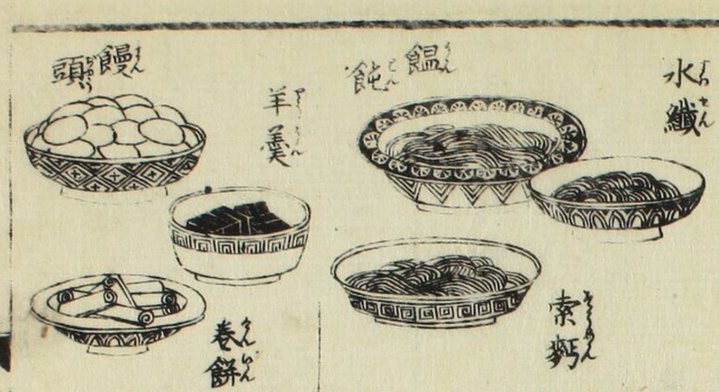
薯蕷腐笋蘿蔔山葵寒汁

○豆腐羹ハ豆腐けとのふ羹おけのふそゝう○辛辣羹ハ坂子けとゝふ○雪林菜ハ菜ゝ○薯蕷腐ハ芋を搗くるのゆそゝろ汁の料ゝ○笋ハ和名タカンナゝゝふ竹の子ゝ○蘿蔔ハ大根ゝ和名オホ子ゝゝふ兎ゝいづれも汁の寒ゝ中ゝ料なゝう

菜者纖蘿蔔煮染牛房昆布搗布烏頭布荒布黒煮蕗蕨薤蕪酢漬茗荷薦子煮物茄物茄子酢菜

茄子乃甘漬納豆煎豆茶苣園豆芹薺羞酢和布青苔神馬藻干甘苔鹽苔酒煎乃

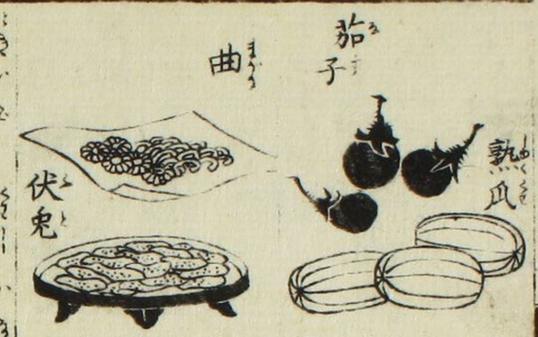
○菜ハ中ゝ仕菜の食ゝるべきゝのとりそゝ
と物ゝて飯汁の料宿に奥ゝるゝ
ゝ中ゝ



松茸平茸の鳴煎等
躰ゝ隨て之を引く
可ゝ

茄乃甘漬納豆煎豆茶苣園豆
芹羞羞酢和布青苔神馬藻
干甘苔鹽苔酒煎乃

○茄ハ中ゝ仕茄の食ゝるべきゝのとりそゝ
と物ゝて飯汁の料宿に奥ゝるゝ
ゝ中ゝ
いゝ中ゝの宿ゝ○纖蘿蔔ハ大根ゝ細く切ゝるゝ○牛房ハ牛蒡ゝ
ゝ和名キタキス又ウムワビギとゝふ○昆布ハ海帯ゝ和名ヒロメ
又ヒスメとゝふ○搗布ハ海帯ゝ仕ゝ細く敷又ゝ
○烏賊布ハ海帯ゝ仕ゝ細く敷又ゝ
布に似て狭く長ゝ
○菊ハ正字草薛ゝ
松とゝふ正字芝
の子ゝ皮黒褐色ゝ



齋以後の菓子者生栗搗栗串柿熟柿干柔花梨子枝椎菱田烏子覆盆子百合草麥陵子御自愛ふ隨て之と用ふ可し

蕎の実ハ毛茶と云て齋ふる俗くらの名也○胡麻、軒中の月のうちに○松茸ハ松のツバウリと云○赤豆ハ美豆く○茶ハ若菖と俗ふケケグサと云○貞心字萬菖と云く○固豆、本字競豆と和名クラマメと云○荻ハ俗ふ二絲茶と云ふ○和布ハ本字石蓴と云○青苔、本字紙苔と云○祇園菓ハ毛巾菓ふ俗ふ種俵と云ふ○胃蓮菓、熟の絡ノ如し○甘蔗ハ本字ふ菓と云○強若ふ考○松茸、本字ふ松菓と云ふ松の陰ふ生ずと云ふ○平茸も平の平蓴と云ふ若柳樹に生ず○石茸ハ茶方の稱くそ世ふ云ふ云ふ

文意 菓の名ハ如此の如く齋の時の稱ふ云ふ

栗串柿熟柿干柔花梨子枝椎菱田烏子覆盆子百合草麥陵子御自愛ふ可し

○串柿ハ竹と書く云ふ

○菱ハ菱の類の如く

請暇病暇寮暇暫暇入僧衆定て浦山敷く思ひ召さ被可き歟點心料送り進ぜら被者無遮之御計ひ爲る可き也所望ふ依て粗之と示し巨細相伴ふ參せ令むる之時計ひ申し可き也恐恐謹言

とゝ云ふ云ふ田南ゆくと云ふ云ふ如菓の名ふ○田爲ふ爲ふ○度度子芋ふて一枝の芋の如くの如菓の名ふ○百合菓ハ毛和名食料ふ云ふ○傷寒後の百病と治せ也ふ云ふ○參條子ハ參條子と菓子の類の如上に結ぶ也ふ云ふ○佐學菓ハ美稲ふ也ふ赤ふ云ふ

文意 食料ふ出ふ菓子の名ふ云ふ

僧院宮滝家の法ふ云ふ云ふ

料紙ふ進ぜ令ふ云ふ

依て粗巨細と示し相伴ふ

時計也云ふ

○請暇人ふ請ふ者ふ

ふ居合ふ云ふ○病暇ハ病ふ外て云ふ云ふ○索暇ハ門ふ出ふて坊舍ふ云ふ○暫暇ハ暫時の暇ふ云ふ云ふ○お伴ふ云ふ人と云ふ云ふ

文意

十月の日　衣鉢集
甲　監守

此間持病再發し又心氣腹病虚労等更發り旁以療治灸治の爲醫骨之仁と相尋ね候ふと雖藪藥師等者間見來る歟和氣丹波之典藥ハ

十月。　監守　衣鉢某甲

友達ゆりて來ることる僧こちらに[illegible]
れるく[illegible]

○素甲素いそんぶーと[illegible]
[illegible]

淺間持病再發又心氣腹病虚労等

灸療爲療治灸治相尋當

醫仁藪藥師等者間見來歟和

氣丹波之典藥ハ

曾以逢ひ難く候ふ施藥院の寮か然る可き之仁有ら者擧達せら被可く候ふ也

針治湯治術治養生之達者殊ふ大切ふ

院寮有之後仁之社參等者也

○素藥ハ一日治して又ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

候ふ此邊ふ候ふ輩者脚氣中風上氣頭風黄瘧赤瘧内痔内癰疔腫物瘡病咳病疾齒瞙等者形の如く見知り候ふ歟癲狂病傷寒傷風虚勞等者才覚無く候ふ

術治者

生き産者浮沈切に注意

腰痛

腰中風上氣頭黄

瘧赤瘧

内痔内癰疔腫物瘡病

咳病疾齒瞙等

人知候欠

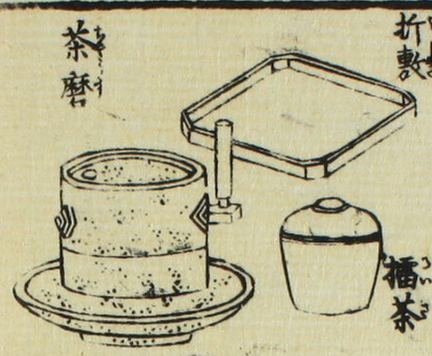
癲狂病傷寒傷風虚勞等

○針治は絡穴を刺して病を治する法なれども病を熟しく○湯治は茶湯薬湯浴泉の如く○術治は呪法○中風は急なるわゆえに灸すべし○上氣は氣血逆上するとなふのゆえ○脚風は脚痛の脚なるゆえ逆上より發る○笑齒は未考赤瘧は内ゆえ氣血ふ逆ふ

同く者搗薬の合藥瀉藥補藥等本方ふ任せ名醫の加減と以て劑を合しこれを服せ令めんと欲ふ

よりて發る○内瘧は六淫邪氣ふ感ずるゆえ風寒暑湿燥火の六淫ふ感ずるゆえ生じ發る○痢は腸胃ふ感ずるゆえ生じ發る○疝は腎ふ感ずるゆえ生じ發る○痔は腸胃ふ感ずるゆえ生じ發る○癰は内ふ感ずるゆえ生じ發る○疔は内ふ感ずるゆえ生じ發る○腫物は内ふ感ずるゆえ生じ發る○疾齒は牙齒の痛ふ感ずるゆえ生じ發る○瞙は眼の痛ふ感ずるゆえ生じ發る○瘧は血の不足ふ感ずるゆえ生じ發る○癲狂は氣血の不足ふ感ずるゆえ生じ發る○眼は眼の痛ふ感ずるゆえ生じ發る○目眩は目の痛ふ感ずるゆえ生じ發る○痛は痛ふ感ずるゆえ生じ發る○痛は痛ふ感ずるゆえ生じ發る○痛は

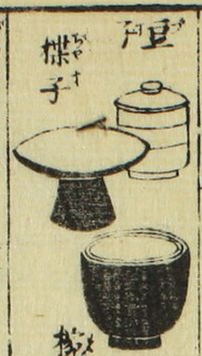
此條尤本望也禁好物の注文合食禁の日記藥殿の壁書ふ任せ寫し給ふ可く候ふ万端筆と馳せ難し併面拜と期す恐恐謹言



十一月十二日　主

稅の助秦　謹上

上計頭殿



玉章と披き嚴旨と窺ひ御用望既分明也仰の如く當道の名醫者奔走有る可き也權侍醫の邊か一流の書籍と讀明め療養共ふ名譽の達者拔群之仁候ふ

以名醫加減合一劑欲令療治條

如本草也擣好物汁文合食禁日

記藥殿壁書令書寫給而令端筆馳

難併面拜期恐恐謹

○擣篩合茶ハ白うて篩き篩うて篩ひくう

調合茶と称茶ハ茶の中の色〜〜うホと猶ひ差ひ茶○本方六人の宮ハ色〜〜

組合せの茶方く○加減ハ病症ふ〜〜と方とをめ〜〜（茶味）或ハ

加減ハとふ○刻ハ調合ハ食の義○禁好物汁文ハ病ひ〜〜合

物ふ禁物物と好物〜〜〜と云付く○合食禁ハ元ハ食合禁

の示と記し〜〜云付く○望云ハ望ハ〜〜云付と云〜〜

本方とうとして名津のハ減ひ〜〜と物〜〜物ハ見物本草と合物の好禁

本草の物と云〜〜〜万端ハ筆物一併て物面の云〜〜〜

文意

十一月十二日　主稅助秦

謹上。上計頭殿。

○〜〜〜

但し渡唐之船中絶ふ依て藥種高直之間大藥祕藥者斟酌の事に候ふ和藥を用ひ〻被者參せ令ひ可き也

人參 遠志 拔薛 仁

○人參生月の遠所にこれ○遠志 白ハ根の麁〻ふまこと今ハ五とをのといふて用ひ○茯苓 ○茯苓ハ松の下に生ず○茯苓ハ生ず○茯苓ハ生ず○茯苓ハ

の重服皆以禁忌之事ふ候ふ也御心得有て養生せら被可き也恐恐謹言

闕之夫食源天地之本人倫之資也故乃酒味湯液乳酪粥飯之類皆以禁忌之可被慎也然乃酒

○房門之交ハ男女ハ交合と也ハ○酒酒

強酒酒酒蘇酒どゝ云ふ○醫酒ハたゞ酒よりゝ強ふとゝ云ふ○睡眠ハ洗ハねばゝ成て病を生ずゝ云ふ○汚穢ハ動ハ身の毒ゝ云ふ○食物飽滿ハ飽まで食すゝ○不飽幸ハ苦不飽の身に成て幸くゝ病と成ゝ苦ハ人と樂ふ情のいゝ苦しきとゝ云ふ○長生病ハ身ふ強ハ生命と歩して病の原まゝ○強不疲勞ハ長強と成て身の疲ゝ○困苦極病ハ常ゝ滋き味ふ飽て病の胎滋すゝと云ふ○熱歌勞傷ハ深く熱歌よ洗ゝて病と傷ゝと云ふ○歌ゝ夫食ハ食物飽足くして食ハざるゝ

十一月の日　主計の頭　進上　主税の助殿

御任國之後烏兎押移ゝ遥ふ面拜と遂げ不る之間頗往日之昵近と忘ゝ如し隨而御上洛之慶音信ふ預ら不候ふ條密契其甲斐無く隔心の至り憚存ぶと雖試ふ推望に及ぶ御氣色如何

○酒ハ夫食ハ飽て食のすゝ○不交ハ宇宙ハ寅の時曉セッとゝ云ふ也ふ後の子ゝ成ゝ○酒味熱湯ハたゞゝくゝ素酒ゝと云ふくゝ○言ハ病ハ長ハ生病と悟て落ゝ成ゝ○夫ハ幸後ハ長ハ病と悪びて幸ゝ

文意　房門ハ交ハ男女ハ交合ハ也ハ○醫酒ハ強酒ハ強酒ハ醫酒ハ強酒ハ醫酒ハ強酒ハ醫

然ふ而國の土産旅籠振ひ等袷と云ひ恰と云ひ日と點ぶること何比ぞ乎兼日示し給も被者他行と止ひ可し

文意

○苜蓿は胡瓜と同時に出るものなり時節の月のもの
ハ[illegible]と陽と合爲といひ[illegible]と云ふ○胡瓜は[illegible]
[illegible]ひ[illegible]○胡瓜は[illegible]ぶて[illegible]
[illegible]○[illegible]○[illegible]

[illegible]

[illegible]

才覺の爲示し給ふ可き也稽古の爲巨細奉て度く候ふ何樣面謁を遂げ心事啓達に可き也恐恐謹言

十二月三日　隼人佐在原　謹上

越前の守殿

すこ〇皮使大奏、答語　或説ハ皮使ハ軍使の主司と指す主殿人しゅ主司と清指して答奏するのとき〇厨炊式ハ主料理方の式法なるべし〇右條約法ハ或説ハ式逸ハ式逸ハ収納撥沈のなり〇勅司ハ郡稼と司る官〇判官代ハ官皮次官皮ハ代官〇庭内と訳判する義也〇沙法ハ公用の法式なり〇年貢の勘定方と指せるべし

才覺ハ二月の五日ハ十月の五日ハ〇巨細ハ二ハ〇巨細ハ〇才覺の義ハ〇巨細ハ〇巨細ハ

十二月。日。　隼人佐在原

御消息忽披閲珍重珍重甚玉珠を得るが如し参拜ハ非ず人者之と謝し難し抑遼遠之國輒書信を通し難きに依て思ひ乍光陰を馳に貴恨深重也何の時っ之と謝せん即案内と啓を可き之處路次の疲勞長途の窮屈只忙然之外他無し恩問ハ依て驚う被る所也

謹上　越前の守殿

○越前ハ越前の主司と主司ハ使ふ國遠と遠沙ハ遠て時ハ使ハ下に御ハ使ハ使ハ刺史ハ〇隼人佐ハ官位の侍ハ官位ハ官名ハ布護ハ中ハ〇五家ハ人家ハ千三代源和天皇ハ天皇ハ年に時て河保祝主の主仲平ハ平重ハ主業平ハ平ハ祝ハ〇姓名

御消息忽披閲珍重甚玉珠

参拜ハ非ず人者之謝し難

抑遼遠之國輒書信

通し難きに依て

思ひ乍光陰を馳に

貴恨深重也何の時

之謝せん即案

内と啓を可き之

路次の疲勞長途の

窮屈只忙然之外他

無し恩問ハ依て驚

被る所也

推

零陵子

入境著任之儀式著府吏務之法儀ハ殊なる子細無し在廳人等日並ひ出仕して恆例奉行等閑無し椀飯盛物積物以下時節の景物を盡し雜事の廚ハ種種の美物を調へ廳庭の經營留守所の結

文意 吉文曰ふ故実うるはしくそなはれる故又ハ故もやうしたの塗をくしとは物をもんぶ仕せる家ハ礼を重ずるの人ハ別かつて服ふとも世せしめ是はいつゝ祝ふ上洛しそふる塗樹国べうしもあるかの疲労ふ忙後のまつりしが数命ふつゝ

○遠を〻しまハ任ふ遠きそるふ者きく○紀光陰ハ朋日とるひとふ○光生寿座八十一月の遠ふ日ふ○忙後ハ人のかれく

入境著任儀式

諸府吏務之法儀式

出仕恆例

物積物以下時節

雜事廚種種美物廳庭經營留守所結

構市を成すが如し

湯治

國の遵行之事大介稅所の留記文書公文田所の結解勘定書生判官代の勘文覆勘郡司權の守の日記目錄國宰小目代の催促の廻文下

文意 若仕若帝の儀式ハ多に繁くしてそ〻ハ日動しく必ずもるる家ふ使大奏の答拾厨の就式ハ時吉凶の物と若し祥と凶と凡役所の經美ものの結搖ふ〻〻市場ふ仕〻

○入境ハ任ふの境ふ入る○長任長官ハ任ふ日おのを任ふ○吏員ハ役人の員故城ふ

○日並出仕ハ役人毎日出勤する○恆例ハ故ふの恆ふ定ふ

○法儀ハ法式儀礼○立廳人ハ宮の廳ふ仕ふ

○椀飯ハ二月の宴ふ○椀飯盛ハ上ふ者て下に行ふ義

○物積ハ物ふ容量の器○雜事の厨ハ定ふる料理の所に出し者うるを厨ふ

○廳庭ハ役所○廳庭ハ役所ふ

○市場ハ人ふ多く集る義

○物市ハ人ふ多く集る義

○廳庭ハ役人の所中

大分稅所紀文書公文田所法

國司遵行之事

司郷司の公事の引付徴使定使の給分交分の宛文名主百姓の請取返鈔臨時點役の證跡

針治

術治

勅定判官代勅文宣旨

郡司擬司田孫太寧小目代

信信也文下司公事一付徴

使定使分交分充文名百姓請

返抄臨時點役證跡

○勅使ハ三月の三度ふるゆ○大分ハ去乃妙し○稅所ハ年貢と納むるなり○荒ハ年貢の留目紀し○ちなハ

ちなみとゆうなり○注ハ三月の三度ふるゆ○田ハ結番勅宣ハ年貢の員數を筆引して未をもつて動むし○出出ハ執筆の名

とゆうなり○判官代ハ郡の三度ふるゆ○勅文ハ勅宣の文なり

○宣旨ハ宣旨の法なり○郡司ハ郡の三度ふるゆ○擬ハ大なり

にゆう又擬ゆもゆう○宣旨ハ宣旨の意なり○小目代ハ目代の下役

御服貢絹の調進準絹準布の濟例別納直進の請文租穀租米の送狀納所の卒法收納徴納之濟期現物色代之償來納過上の準據早水乃両損ハ田の不熟と檢損損亡之勘注ハ散失と算用し都合勘合して聊其煩無く

奉行人

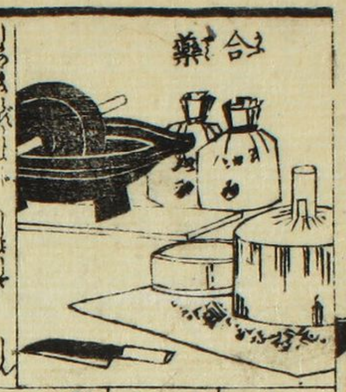
うう○注ハ三度ふるゆ○百姓ハ年貢を納めるその巳ハ○下司ハ年貢の人の被友し○郡司ハ文宣の郡し○その月ハ八月の三度ふるゆ○徴

付ハ隨時の百役○定使ハ定めるる使者○交分ハ未詳ふるゆ○俸

祿の利徴すべき物をいふなり○充文ハ充をもつて充文をいふなり○百姓請文ハ百姓の請文なり○臨時ハ不時ふしぎなる臨時の點役なり

御服貢絹準布濟例別納直進請文租穀租米送狀納所卒法收納徴納濟期現物色代償來納

三ヽ勅使宣旨用散失算合勘合和



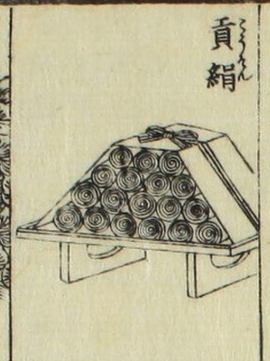
加之諸寺諸社の神拜宮宮の奉幣寺寺の入堂節節の法會連連の佛事先創と守と怠慢無く候ふ也總而異儀之黎民無く而納法之利潤莫大也難澀之郷保無く而土貢之現利

文意 ○技貢絹調進ハ貢ふ絹と云こと○準布ハ絹布ハ準て納と納むこと○別納ハ代友とこゝ〜おこなふ人とゆて納むこと云ふこと○別納百姓ハ代友とこゝ〜おこなふ人とゆて納むこと云ふこと○租穀租米ハ貢の米穀なり○絹所幸法ハ租稅所の法度なり○收納ハ受のふ納むる事貢なり○微納ハ微所〜なれ〜ハ代友とこゝ〜おこなふ人とゆて納むこと云ふこと○滅納ハ貢皆滅の日宿なり○現物ハ代〜僕ハ米をの苦わ〜ひハ納ホの所ふ〜ふ物をゆく幸貢ふ代納むをゆふ○本納ハ正準授ハ米年の貢と今年に名納ひ〜ハ米を一年ふ〜ハ準授〜て貢〜ふとゆふ○旱ハ旱魃ごく〜ハ田の苗熟と枯〜ハ枯亡の動ハ苗米と等困ハ合動合〜ハ郷ハ郷義のなり〜

文意 ホの苗ハふるゆ〜ハ旱魃ハ貢の仕〜ハ上ふ〜ハ

加し諸寺法社神祭〜奉幣寺寺〜入堂節〜法令連〜佛事ハ〜ハ

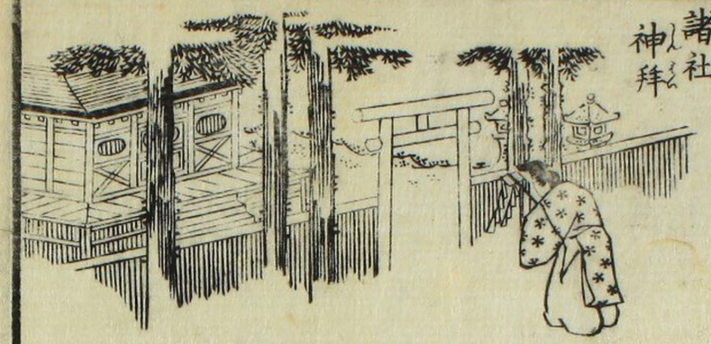
巨多也萬事雅意ヨ任せ一〜と而違亂無し心事多〜と雖紙面ふ盡〜難〜併後日と期に恐恐謹言



巨多也萬事雅意ヨ而納法利潤莫大也難澀之郷保ハ貢〜ハ利益多也難澀之雅意ハ一〜と而違亂無〜紙面ハ盡〜ハ後日ハ〜ハ

文意 ○巨多ハ巨多〜ハ〜ハ○雅意ハ雅〜ハ○黎民ハ百姓ハ○澀ハ〜ハ○郷ハ郷保ハ村〜ハ○貢ハ貢ハ○法ハ法ハ○準ハ準ハ○準布ハ準布ハ○準授ハ準授ハ○準布ハ準布ハ○準授ハ準授ハ○準布ハ準布ハ○準授ハ準授

十二月三日　越前の守　磯部　進上
隼人の佐殿



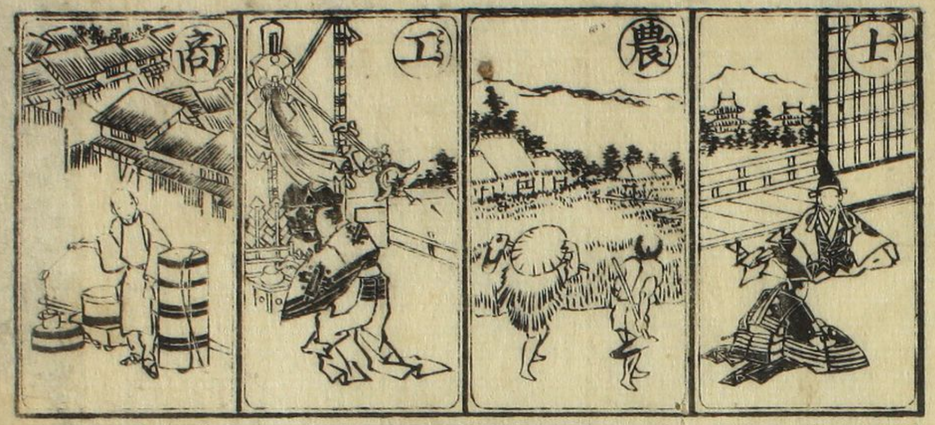
十二月三日　越前の守　磯部　進上
隼人佐殿

山嵜久作刪補

○後鳥羽天皇六十九代宇多天皇八代の孫佐々木源三秀義の三男三郎盛綱の孫右馬丞実の子秀宗左馬允右衛門尉と号し佐々木の姓なり

嘉永五子歳孟秋新刻

東都書肆　甘泉堂　和泉屋市兵衛版



諸國書林	奥州仙臺	伊勢屋半右衛門
	甲府角町	村田屋孝太郎
	下總佐原	正文堂利兵衛
	上州高崎	澤本屋要藏

東都書林	日本橋通一丁目	須原屋茂兵衛
	淺艸茅町二丁目	須原屋伊八
	芝神明前	岡田屋嘉七
	日本橋通二丁目	小林新兵衛
	本石町十軒店	英大助
	横山町三丁目	和泉屋金右衛門
	横山町一丁目	出雲寺萬次郎
	日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛

6508